

千葉教育

菊

令和6年度
No.688

千葉の子どもたちの未来のために

特集

小中一貫教育の現状

○シリーズ 現代の教育事情

筑波大学人間系 教授

樋口 直宏

我孫子市教育委員会指導課

鴨川市立長狭学園 校長

関口 和則

○提 言

公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・

チャリティーズ・ジャパン 東大ハウス



千葉県総合教育センター



加茂から世界（グローバル）につながる生徒の未来づくり

市原市小中一貫教育校 加茂学園 市原市立加茂小学校 市原市立加茂中学校

校長 ^{むらまつ}村松 ^{くに お}邦生

加茂学園は、房総半島の中央、市原市南部に位置する。学区は、上総丘陵の山岳地帯を養老川が南北に貫通し、「チバニアン」地球磁場逆転期の地層がある豊かな自然に恵まれた地域である。平成25年4月に、高滝・里見・富山・白鳥の4小学校を統合し加茂小学校を創立、加茂中学校と併設し、施設一体型の小中一貫教育校として開校し、今年で開校12年目を迎えている。

本校では、1年生から4年生を前期ブロック、5年生から7年生を中期ブロック、8年生・9年生を後期ブロックとして4・3・2年制を敷いている。前期ブロックは、学級担任によるきめ細かな指導を行い、基本的な生活習慣と基礎的な学力の定着を図る時期、中期ブロックは、身につけたことを活用して論理的思考力・判断力・表現力を育成し、自己有用感を高める時期、そして後期ブロックは、身につけたことを発展させ、自立して社会で生きていく学力と他者と協働する社会性を育成する時期としている。

小中一貫教育校の特色は、異学年交流である。本校では、日常の清掃活動、生徒会活動をはじめとして、ふれあい給食、ふれあい昼休み、体育祭での異学年種目など上級生と、下級生のふれあいの場を大切にしている。

また、今年度より学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールとして歩みを始めた。春には、小湊鐵道里見駅近くの山桜「与一郎桜」へ全校生徒が散歩し学級やブロックの写真を撮影したり、1、2年生は養老川漁業組合の方々の協力により鮎の放流を行ったりするのが恒例となっている。学校給食センター

から講師を招いての食育指導やチバニアンガイドによる特別授業、朝の挨拶運動や花壇の花植え、広い校内の除草作業も保護者や地域の皆様の御厚意により行われ、地域と連携した教育活動が根付いている。

令和2年度から市原市教育委員会「未来へつなぐ教育小中一貫グローバル化推進校」に、令和4年度から文部科学省「教育課程特例校」に指定された。教育課程を再編して、GC科（グローバル・コミュニケーション科）を設置し、英語を中心としたコミュニケーション能力を高める授業を各学年で週1時間行っている。また、総合的な学習の時間では、グローバルな視点から探究課題を設定し、GC科と連動させながら学習を展開している。常駐する3名のALTの活用により、日常的に英語を中心とした他文化と関わることで、他者とのコミュニケーションを図る資質・能力が育まれている。毎月設けているEnglish Weekでは、挨拶が英語で交わされ、5月に実施した関西方面への修学旅行では、9年生が外国からの旅行者に物怖じせず英語でインタビューする姿が見られコミュニケーション力が向上していることを感じる。

加茂地域の自然と人とのふれあいによって育まれた素直で誠実な子供たちに、予測不能な未来の社会をたくましく生き抜く力を育てていきたい。そして、誰もが明るく笑顔で生きることができる社会の実現に向けて、自分も周りの人も大切にできる人づくりを、学校・家庭・地域が一つになって進めていきたい。すべては子供たちの未来のためにオール加茂で！

- ◆学校自慢 加茂から世界（グローバル）につながる生徒の未来づくり
市原市小中一貫教育校 加茂学園 市原市立加茂小学校 市原市立加茂中学校校長 村松 邦生
- ◆提言 みんなで支え合う社会に向けて～ドナルド・マクドナルド・ハウスの紹介～
（東大ハウス ハウスマネージャー代行 藤本氏 インタビュー要旨）
公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン 東大ハウス…2

シリーズ 現代の教育事情 小中一貫教育の現状

- 小中一貫教育の実践と課題 筑波大学人間系教授 樋口 直宏…4
- 我孫子市の小中一貫教育の現状と取組 我孫子市教育委員会指導課…8
- 小中一貫校「長狭学園」の現状と今後（黎明期から充実期へ）
鴨川市立長狭学園 鴨川市立長狭小学校 鴨川市立長狭中学校校長 関口 和則…10

チーム学校の仲間たち

- 学校を創る 社会関係資本とのチームでワクワクする学校に 船橋市立金杉台小学校校長 竹森 正人…12
- 学校を支える 私の日々の実践（取組） 九十九里町立片貝小学校教頭 青江 智史…14
- 学校を動かす 県立柏井高等学校の実践の紹介 県立柏井高等学校教諭 三神 陽…16
- 授業を創る 授業を核とした学年経営－協働的な学びの手法を取り入れた授業実践を通して－
八千代市立村上東中学校教諭 鈴木 辰英…18
- 授業を創る 生きた教材となる献立作成 佐倉市立和田小学校栄養教諭 森 美貴…20
- 事務室から チームを意識した事務職員としてのかわり
流山市立おおぐろの森中学校副主査 根本 隼人…22
- 保健室から 「毎日の生活と健康」～自分の体調を伝えてみよう～
市川市立稲荷木小学校養護教諭 石原 晶子…23

長期研修生報告

- 令和5年度長期研修生の研究の紹介 令和5年度長期研修生…24
- 教職大学院研修生の研究の紹介
校内実践事例に関するポータルサイトの運営を通した1人1台端末の活用の推進
千葉市教育センター指導主事 赤岡 俊輔…28
- 大学院研修報告
地域連携を継続・発展させていく学校組織体制のあり方－福祉系高校に焦点をあてて－
県立松戸向陽高等学校教諭 望月 玲子…29

ケーススタディ～Change the world～

- 未来を創る学び－生成AIとICTが拓く教育の可能性－ 船橋市立飯山満中学校教諭 内藤 亮生…30

情報アラカルト

- 開館50周年記念特別展「浅井忠、あちこちに行くーむすばれる人、つながる時代ー」 県立美術館…32
- 開館30周年記念 令和6年度企画展「見るー生き物の目・機械の目ー」 県立現代産業科学館…33

学校 NOW！

- 高校NOW！ 【連載・県立高校の今】令和6年度 第3回
県立土気高校（保育基礎コース） 令和6年度再編校の紹介（令和6年度掲載のおさらい）
県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室…34
- ◆発信！特別支援教育 主体的・対話的で深い学びを目指した授業づくり～児童生徒一人一人に合わせたICT機器の活用～
県立千葉特別支援学校教諭 野村裕美子…38
- ◆千葉歴史の散歩道 博物館の体験学習で歴史を散歩する
県教育庁教育振興部文化財課文化財主事 畑中乃咲佳

道 標

平成26年5月の教育再生会議において「小中一貫教育を制度化するなど学校段階間の連携、一貫教育を推進する」ことを求めた第5次提言が取りまとめられた。同年12月には中央教育審議会から、義務教育9年間の教育課程を一体化した「小中一貫教育学校」の創設など小中一貫教育の制度化が答申された。これらを受け、平成27年6月に学校教育法等の一部改正により、平成28年度から新たな学校種である「義務教育学校」や9年間の教育を一貫して行う「小中一貫教育型小学校・中学校」である「併設型小学校・中学校」の設置が可能となった。

これらの制度改正によって、義務教育9年間を通じた継続的な教育活動を行う小中一貫教育の取組

を継続的・安定的に実施できる制度的基盤が整備された。

本県においては、平成21年4月に鴨川市立長狭学園長狭小学校、長狭中学校が県内初の小中一貫教育校「長狭学園」として開校した。長狭学園の開校から15年を経て、本県においても様々な義務教育学校、小中一貫校が設立され、地域の課題や実情を踏まえた教育課程が展開されてきた。

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」でも言及されているように、9年間を見通した新しい時代の義務教育の在り方を考えていくことが必要とされている。本号が小中一貫教育をより発展していくための一助となれば幸いである。

みんなで支え合う社会に向けて ～ドナルド・マクドナルド・ハウスの紹介～ (東大ハウス ハウスマネージャー代行 藤本氏 インタビュー要旨)

公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン 東大ハウス



ドナルド・マクドナルド・ハウス・
チャリティーズ・ジャパン

1 ドナルド・マクドナルド・ハウスとは

ドナルド・マクドナルド・ハウス（以下ハウス）は、家から遠く離れた病院に入院や通院をしているお子さんや、その家族のための滞在施設です。子供の入院生活は病気の種類



図1 東大ハウス

にもよりますが、長期に及ぶこともあります。そのような中で、治療に付き添う家族の心や身体をリセットする時間と場所が必要だと考えています。ハウスは、そのような家族が心身を休め、リフレッシュしてから再度お子さんの待つ病院にまた戻っていくことができるよう、「Keeping Families Close（どんな時でも家族が一緒にいられるように）」という合言葉を掲げてスタッフやボランティアが活動しています。

所が必要だと考えています。ハウスは、そのような家族が心身を休め、リフレッシュしてから再度お子さんの待つ病院にまた戻っていくことができるよう、「Keeping Families Close（どんな時でも家族が一緒にいられるように）」という合言葉を掲げてスタッフやボランティアが活動しています。

2 ドナルド・マクドナルド・ハウスの起源

スタートは今から50年ほど前のアメリカ、フィラデルフィアです。当時、有名なアメリカンフットボール選手だったフレッド・ヒルさんという方の娘さんが白血病にかかり入院しました。娘の入院中、彼が目当たりしたのは、付き添う家族の肉体的・精神的・経済的な負担でした。患児自身は病院で医師や看護師さんのケアを受けることができます。しかし、周りの家族は、わが子の小さなベッドの横に小さくなって寝たり、床にバスタオルを敷いて寝たり、駐車場の車の中で夜を明

かしたりと実に過酷だったそうです。

子供のためならと、付き添う家族が我慢し、乗り切っていたのでしょう。けれどこのままでは、お子さんの病気が治る前に家族が倒れてしまうことになりかねない。そこでフレッド・ヒル選手は小児科医からの助言を参考に、家族のための滞在施設を病院の近くに作ろうと、募金活動を始めました。これにマクドナルド社をはじめ、様々な企業や個人が協力し、1974年に第一号ハウスが誕生しました。世界中で、寄付や募金・ボランティアによって家族の滞在施設を運営していくことになりました。現在では全世界で約380か所ものハウスが療養中のお子さんや家族に寄り添っています。日本では、2001年に国立成育医療研究センター（世田谷区）に「せたがやハウス」という国内初のハウスが設立されました。（東大ハウスは2011年12月に設立され、国内8番目。）

3 東大ハウス職員になったきっかけ

私は、ここに勤めて3年が経とうとしていますが、その前は他の仕事をしていました。子育てが一段落し、時間や自分自身にゆとりができたので「感謝の気持ちを込めて何か社会に貢献したい。」と考えるようになりました。

漠然と何かできないかと探していた所、このハウスのボランティア活動を見つけ、登録しました。当時はコロナ禍だったこともあり、ボランティア活動自体は何回もできたわけで

はありませんでしたが、新しい発見や気づきをたくさん得ることができました。その中の1つとして、家族が大きな病気もなく、健康ですごしてきたということは当たり前ではなかったということに気づかされました。それはとても幸運なことで、大変な状況にある方がいることを知りました。厳しい状況の中で患者とその家族は他の方からは一見可哀そうと思われがちですが、皆さん喜びを見つけて毎日を楽しく前向きに生活をしようとしています。そんなご家族を応援したいと思うようになりました。そんな中、「東大ハウス」を運営する公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパンの職員の募集を見つけました。知らない領域、世界を更に見てみたいと思い応募し、現在に至ります。もしかすると、20代の時にこの仕事を目にしても選択肢に入って来なかったかもしれません。何かピンと来ないというのが正直な所だと思います。ただ、その時はできないかもしれませんが、ライフステージの変化やゆとりが出てから働き始めたり、自分の思考や信念で行動するのもいいのではないかと思います。そこでの新しい発見や考え方に触れ、自分の視野を広げる大きなチャンスだったと思っています。

4 さいごに

現在、「東大ハウス」では私を含め、5名のスタッフがいます。そしてハウスの運営は、スタッフだけでなく、多くのボランティアさんによって支えられており、186名のボランティアさんに登録いただいております。ボランティアは学生から年配の方まで年齢層も幅広く、無理のない範囲で協力いただいています。私たちは「ファミリー・センタード・ケア（家族を中心としたケア）」の実現に向け

て医療を社会で支える仕組みづくりに取り組んでいます。これは病気のお子さんとその家族を病院だけではなく、地域や社会全体でも支えていこうというものです。その一端をボランティアの方々が担ってくださっています。ボランティアだけではなく、我々スタッフだったり、商店街のおじさんやおばさんだったり…誰か一人だけで頑張っていく時代は終わりにして、みんなでみんなを支え合いながら共助溢れる社会になっていかないと小児医療をはじめ日本の抱えている諸問題を解決していけない世の中になってしまうのではないかと思います。

私達はボランティアの輪を広げていきたいと考えています。ですが、これは先生方にボランティアに登録してください、ということではありません。例えば、授業や学活・ホームルームの1コマでこういったハウスやボランティアのことを話題にいただいたり、職員や保護者の方々との雑談で応援するにはどうしたらよいか、自分が今何ができるのかと考えてもらったりすることがハウスのみならず、ボランティアの考えや支え合いの社会の輪が広がっていくことにつながるのではないのでしょうか。

今回の記事に掲載できなかったハウスの情報・活動については右の二次元コードからご覧ください。



小中一貫教育の実践と課題

筑波大学人間系教授 ひぐち 樋口 なおひろ 直宏



1 はじめに

2015（平成27）年に学校教育法等の一部が改正され、新たな学校種として義務教育学校が設けられた。また、義務教育学校に準じる形で小（中）学校併設型中（小）学校もしくは設置者が異なる連携型学校も規定された。学校基本調査（2023（令和5）年度）によれば、全国で義務教育学校は207校（千葉県は4校）、小中一貫教育を行う小学校は958校（千葉県は13校）、中学校は583校（千葉県は10校）ある。法制化や少子化に伴い、小中一貫教育は今後さらに発展することが予想される。そこで本稿では、筆者が関わってきた事例を中心に、小中一貫教育のねらいや実践および課題について検討しながら、これからの小中一貫教育のあり方について考察したい。

2 小中一貫教育のねらい

小中一貫教育は、2000（平成12）年に広島県呉市で取り組まれたのが始まりとされている。その後、2006（平成18）年には東京都品川区で公立施設一体型小中一貫校が開校され、各地で実践が進められた。

呉市の場合、文部科学省研究開発学校として6－3年制を4－3－2年制に転換することをねらいとしていた。それは、身体的な発達の加速化、学力の低下、思春期に落ち込む自尊感情、生徒指導上の諸問題、中学校に上がる際の不安といった点で6－3年制が実態に合わなくなってきたことに起因する。かつては中学校で生じていた問題が増えているこ

とに対して、5－7年の中期に特色を置いたカリキュラムを開発した。（『公立小・中で創る一貫教育』ぎょうせい）

品川区の場合、学校選択制、外部評価者制度、学力定着度調査と学校公開といった、「プラン21」と呼ばれた取組の一つとして位置づけられている。特に小中一貫教育については、同じ義務教育でありながら小学校と中学校との間には、新たな友人関係の構築、先輩後輩との関係、部活動、授業内容や指導方法、定期テスト、制服や生徒指導、受験対策といったさまざまな違いがある。それは、中1ギャップと呼ばれる中学校生活への不適応とそれに伴う不登校の問題にもつながる恐れがある。また両者の情報交換も十分行われておらず、教員の意識改革という面も伴っていた。このような課題を解決するために、小・中学校が9年間をかけて学力を育み、人間形成に寄与するといった取り組みが始められた。

これらに対して、近年では少子化に伴う学校統廃合の手段として、小中一貫教育が導入される動きがある。文部科学省では2015（平成27）年に「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」を策定したが、ここでは学校規模の標準（12～18学級）を下回る場合、統廃合による魅力ある学校づくりの例として小中一貫教育を導入することにより、社会性の育成や切磋琢磨する環境の整備、多様な考え方に触れる機会の確保が期待できるとされている。また小規模校を存続させる場合でも、小中一貫教育の導入により小学校段

階・中学校段階全体として一定の集団規模を確保することが提言されている。

3 小中一貫教育の方法と実践

小中一貫教育を導入する場合、どのような方法が考えられるだろうか。ここでは、カリキュラム、学校制度と授業、異学年交流の3点から実践事例を検討してみたい。

(1) 9年間を見通したカリキュラム

文部科学省「小中一貫教育等についての実態調査」(2015(平成27)年)において、小中一貫教育は「小中連携教育のうち、小・中学校が目指す子供像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、系統的教育を目指す教育」と定義されている。施設一体型もしくは併設型に関わらず、目指す子供像が小中間で共有されるとともに、9年間を見通した系統的教育課程の編成が小中一貫教育には求められる。また、告示において教育課程の特例が認められており、新教科の設置や指導内容の入替え・移行が可能である。

具体的には、市町村単位での小中一貫教育カリキュラムを作成した例として「品川区立学校教育要領」や「横浜版学習指導要領」がある。そこでは、学習指導要領を修正しながら総則および各教科における9年間の教育内容や授業展開例を提示しており、他の小・中学校区でも同様の資料を作成することも多い。また、我孫子市「Abi小中一貫カリキュラム」のように、ふるさと、道徳、英語、キャリア、ICTについて学びの系統表とともに学習指導案や教材を作成した自治体もある。

これに対して、指導内容の入替え・移行を行っている事例は少ないが、京都教育大学附属京都小中学校では、資質・能力を育成するための教育課程の再構築を課題とした研究開発学校の指定を受けている。具体的には、英

語の授業を1学年から実施(生活科の時数減)、食育とプログラミング学習を柱とした技術・家庭科を3学年から実施(家庭科時数の前倒し、算数や理科を時数減)、6・7学年歴史分野を2年間で学習できるように整理(時数減)等、入替え・移行を積極的に行っている。

また、新教科の設定については多くの事例がある。品川区では道徳、特別活動、総合的な学習の時間を合わせた「市民科」を設け、自己管理・人間関係形成・自治的活動・文化創造・将来設計の5領域から成る独自の教材を作成している。茨城県つくば市の「つくばスタイル科」では、環境、キャリア、歴史・文化、健康・安全といった内容を通して発信型のプロジェクト学習とともに、地域にある研究所や人材を活用した実践を行っている。静岡市では「しずおか学」として、生活科・社会科における地域学習に加えて、道徳の一部で副教材「しずおか学一BOOK」を用いてマナーや礼儀について学ぶとともに、総合的な学習の時間では、「しずおか学副読本」を用いて、お茶、しずまえ、オクシズ、海洋文化、防災、歴史文化の中から学校が内容を選択する。長野県茅野市「縄文科」では、遺跡発掘や土偶づくりを通して縄文時代の生活や郷土について学習する取組を実践している。

(2) 学校制度と授業

学校制度については、9年間の区切りや併設型小・中学校の関わりといった取組がある。4-3-2年制を採用して、前期は習得、中期は活用、後期は探究中心の授業を目指すことが多いが、京都市や兵庫県小野市のように、5年生までを併設型小学校、6年生からは併設型中学校という5-4年制を採用する学校もある。また、併設型小・中学校の関わりについては、中学校区にある小学校を学園とし

てグループ化して、一体感をもたせようとする。例えばつくば市には4校の施設一体型義務教育学校があるが、これとは別に14校の中学校があり、それぞれを学園として32の小学校がいずれかの学園に所属している。

これに対して、授業で実践されるのは、中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」(2021(令和3)年1月)においても導入が提言された小学校教科担任制と、乗り入れ授業である。中学校の教科担任制に小学校高学年から慣れるだけでなく、教員が中学校の教科内容や指導方法を理解したうえで授業を設計するとともに、中学校教員にとっても小学校での指導内容や児童の実態を知ることによって授業改善に役立つ。また、中学校教員の小学生に対する乗り入れ授業や、小・中学校教員のチーム・ティーチングによって、理科実験や武道といった専門性の高い授業、および小学校段階の復習指導や個別指導が可能になる。

この他にも、中期段階の選択科目や習熟度別学習の一部を、児童生徒の関心や理解度に応じて、無学年制で実施することもある。呉市の導入当初においては、中期選択教科として5-7年生が約10のコースのいずれかを選択して、10回20時間の授業を異学年集団で実施した。品川区でも、児童生徒の実態に応じて基礎基本や発展的学習を行うステップアップ学習の時間を設けていたが、現在は市民科の一部を使って地域や学校の特色を出す「一貫プラン」の時間に充てている。また、茨城県那珂市においては、9年間の学びのデザインとして4-3-2年制の区切りごとに学びのプラン、授業の心得、家庭学習に関するガイドを示すとともに、各教科の学習のポイントを確認するための「学習の手引き」を作成して、家庭学習との連携を図っている。

(3)異学年の交流

異学年交流は、中1ギャップだけでなく、地域における子供どうしの関わりという役割も果たしている。特に施設一体型義務教育学校では、同一校舎内で小中学生が9年間を過ごすことで、相互に影響を及ぼす。具体的な取組の例としては、品川区立日野学園義務教育学校のB&S(Brother & Sister)活動や、FSS(Five Six Seven)活動があげられる。B&S活動では、週の当番となった9年生が1年生の教室に行き、朝の学級活動と昼の給食、休み時間、清掃活動とともに活動する。またFSS活動では、5-7年生の縦割り班で自由遊び等の活動をする。この他にも、ランチルームで交流給食を異学年で実施したり、清掃活動を全学年の縦割り班で実施したりすることも、義務教育学校では行われている。

これに対して、併設型小・中学校においては校舎が離れている分、異学年交流は行いにくい。その中で、那珂市は年に1回土曜日に「小中一貫教育の日」を設けており、中学生が出身小学校に移動して、縦割り班での話し合い活動、キャリア教育に関する異学年交流授業、地域探検、起業体験、地域清掃といった交流活動を実施している。また併設型の場合、複数の小学校から中学校に進学することで新たな友人づくりが課題となるため、異なる小学校を訪問して同学年の交流活動を行ったり、校外学習の場所と時期を揃えて合同で活動したりするといった事例もある。

低学年にとって中学生は大人に近い存在であり、自分を守ってくれる信頼とあこがれを感じるだろう。一方、中学生にとっても積極的に関わってくる小学生を前にして、優しさや思いやりといった意外な一面を見せることもある。8・9年生の役割は、学校全体のリーダーとしての信頼と責任感の醸成に寄与していると思われる。

4 小中一貫教育の課題

教員研修会での感想に「校舎は別、名前だけ『一貫』という文字を入れ4－3－2年のまとまりを意識とは言われたものの、小中の行き来はあまりなく、制服も中1からの着用なので、中1ギャップの解消にはつながっていないのみならず、夏休みに小中連携会議で半日がつぶれ、教員の負担が増えただけのように思う。」というコメントがあった。ここには、どのような課題があるのだろうか。

一つには、小中一貫教育の理念が、実践に十分反映していないことがあげられる。筆者の調査においても、カリキュラム面では内容の入替え・移行よりも新教科の設定に重点が置かれており、学習面でも既習単元の確認や中学校の予告程度にとどまっている場合が多かった。組織運営面でも、学園目標と学校目標が異なっている場合や、小中間の打ち合わせや研修についても、各学校でコンピュータ上に保存した資料や実践を、各自で確認するだけという場合もあった。小中一貫教育コーディネーターの配置も、カリキュラム開発から児童生徒の実態把握、乗り入れ授業までを一人で任されるか、逆に学校・学年間の連絡役にとどまっていた。これらの背景には、教員自身に小学校または中学校の所属という意識があり、子供に寄り添う小学校的指導や学年全体で対応する中学校的指導という様式が定着していることがあげられる。

もう一つは、併設型小・中学校のあり方に関する課題である。6－3年制を維持したままの小・中学校での実践には限界があるのは当然であり、施設一体型でできることとの違いを整理する必要がある。例えば小中一貫カリキュラムの実施は併設型でも可能であるが、教材の開発や乗り入れ授業については、自治体独自の教員採用やコーディネーターの加配

等、教育委員会の協力が必要になる。児童生徒の交流については、移動の問題や6年生のリーダーシップの課題があるが、ICTを用いた遠隔での活動や、CSCLやオンデマンド教材による異学年合同での習熟度学習やテーマ学習は実現可能と思われる。それとともに、児童生徒の学習や生活に関する情報の継続的な共有や、音楽や家庭科、養護教諭等、担当者が少ない分野における小中間の連携も、併設型においては有効な取組であろう。

5 おわりに

今日では、チーム学校や部活動の地域移行、企業人・研究者等の積極的活用が提言されている。小中一貫教育においても、学校の基盤となる地域がどのように関わり、情報提供や授業・生徒指導・行事等の支援を行うかが、重要であると思われる。そのためにも、小中一貫教育とコミュニティ・スクールを一体化させて、各学校の情報を共有したり、地域としてどのような取組を共通して行ったりするのかを考えることが求められる。その際、安全や防災、高齢化やまちづくりといった地域の課題を解決するために学校がどのように関わっていくかを検討することは、小規模校における小中一貫教育のあり方を考える際にも参考になる。

義務教育学校はもとより、併設型においても最終的には小学校でも中学校でもない学校文化の創出が、小中一貫教育にはのぞまれる。そこでは、小学生を中学校の仕組みに慣れさせるのではなく、教員が小・中学校両方を意識しながら、9年間かけて児童生徒を指導し見守ることが求められる。そのような異校種間の交流や情報交換によって、これまでとは異なる角度からの教員の資質向上や、学校経営の活性化につながることを期待される。

我孫子市の小中一貫教育の現状と取組

我孫子市教育委員会指導課

1 市が目指す小中一貫教育について

我孫子市は、「我孫子市小中一貫教育基本方針」を策定し、各中学校区で共有する目標として「目指す15歳の姿」と「基本方針（中学校区小中一貫教育グランドデザイン）」をもとに、小中学校を一貫するカリキュラムや小中学校の教職員・児童生徒の交流を通して、小中一貫教育を推進している。

(1)これまでの推進の経緯

- | | |
|-----|---|
| H25 | 小中一貫教育推進委員会の立ち上げ |
| H26 | 「我孫子市小中一貫教育基本方針」の策定
布佐中学校区を推進モデル地区に指定（3年間） |
| H27 | 「Abi☆小中一貫カリキュラム」完成 |
| H28 | 段階的に各学校の教育課程に
「Abi☆小中一貫カリキュラム」を位置付け |
| H30 | 「小中一貫教育グランドデザイン」作成 |
| H31 | 「小中一貫教育グランドデザイン」運用開始
⇒全ての中学校区で小中一貫教育がスタート |
| 転換期 | |
| R4 | 全ての小中学校に学校運営協議会を設置
⇒コミュニティ・スクール（CS）がスタート |
| R6 | CSと小中一貫教育の一体的推進に向けて各中学校区
の特色あるオリジナルカリキュラムを作成 |

(2)市の小中一貫教育で育む力

我孫子市が小中一貫教育で目指すところは、義務教育9年間の学びを充実させ、子どもたちに「生きる力」を育成することである。

そのために、市が目指す子ども像として、次の3つの柱を掲げている。

- ①「ふるさと我孫子」を愛し、誇りに思う子ども（郷土愛）
 - ②確かな学力を身につけ、夢を持ちチャレンジする子ども（未来を拓く力）
 - ③自分に自信を持ち、自他を大切にする子ども（輝く心）
- これらの子ども像に向けて、小中一貫教育

で特に育んでいきたい資質・能力を「コミュニケーション力」「チャレンジ力」「豊かな心」の3つとして重点的に取り組んでいる。

(3)推進する3つの「つなぐ」

我孫子市の小中一貫教育は、それぞれ小中学校の施設が離れているため、次の3つを「つなぐ」ことにより、推進している。特に、小学校5・6年生、中学校1年生の接続を重視している。

①「環境」でつなぐ

児童生徒の実態や発達段階に応じた学習面や生活面のきまりや約束などを中区で共有

②「学習」でつなぐ

義務教育9年間をつなぐ系統的なカリキュラムの実施と体験活動の充実

(ア)市の小中一貫共通カリキュラム

「Abi☆小中一貫カリキュラム」

○我孫子市の教育を象徴するカリキュラム

- ・「Abi－ふるさと」

ふるさと学習への取組（地域資源の活用）

- ・「Abi－キャリア」

我孫子市の独自性を生かした豊かな活動（地域人材の活用）

○子どもたちの成長や学びの土台となるカリキュラム

- ・「Abi－道徳」

我孫子の先人を通して郷土愛を育む

- ・「Abi－English」

小学1年生からの系統的な学び

- ・「Abi－ICT」

ICT教育・活用の推進



(イ)中学校区のグランドデザインを実現し地域の特色を生かしたカリキュラム

「〇〇中学校区カリキュラム」

③「人」でつなぐ

○小中学生の交流（小中一貫の日の実施）

○小中の交流

○小中学校教職員の相互理解の促進

○学校・家庭・地域の連携協働（中学校区学校運営協議会会議・地域学校協働活動）

(4)コミュニティ・スクール（CS）との一体的推進に向けて

子供たちの義務教育9年間での豊かな学びや体験活動をさらに充実させるため、令和4年度から全ての小中学校にCS制度を導入し、地域学校協働本部と連携・協働しながら「地域とともにある学校づくり」を推進している。

令和6年度から中学校区独自のカリキュラムをととして「小中一貫教育」と「CS」を一体的に推進することを重点として、教育活動を進めている。

2 中学校区の実践例

(1)「Abi☆小中一貫カリキュラム」の実践

各学校で実践している「Abi☆小中一貫カリキュラム」が目指す子ども像の育成に有効であるか、検証をしている。また、その様子を他校や保護者、地域の方々に広く周知するため、小中一貫日より「繋～TSUNAGU～」で紹介している。（「繋～TSUNAGU～」は市のHPからも閲覧可能）

Abi-ふるさと「我孫子の先人」～嘉納 治五郎～

6月20日に湖北台西小学校の5年生で Abi-ふるさととの授業が行われました。この学習では、嘉納治五郎の「柔道の父」としての功績及びその生き方や精神について理解することが目標です。

初めに、先生が準備してくれたクイズや動画で、柔道が日本発祥のオリンピック競技であることや治五郎の別荘が我孫子市にあったことを知りました。次に、補助教材『ふるさと我孫子の先人たち』を読み、嘉納治五郎がどんな人だったのか、どんなことをしたのかについて学びました。柔道の精神やアジアで初めてのオリンピック開催を願った治五郎の思いに触れ、治五郎の生き方について考えました。

授業の振り返りでは、「嘉納治五郎は強さと優しさを備えたすごい人。こんなすごい人が我孫子にいたなんて嬉しい。」「自分も柔道の精神である精神力を意識すれば、友達と上手に関わっていきけるのかな。」など我孫子市を誇りに感じたり、自己と向き合ったりする感想が見られました。

小学校5年から中学校2年までは、毎年3人ずつ我孫子の先人について学び、中学校3年では、興味を持った先人について調べ学習を行います。そのスタートにふさわしく今後も楽しくなる授業でした。



左下記事は、我孫子市にゆかりのある先人について学ぶ「Abi-ふるさと」の学習の様子である。市が作成した「ふるさと我孫子の先人たち」の副読本を使用して学習している。

(2)オリジナルカリキュラムの開発と実践

全ての中学校区で育てたい子ども像の実現に向け、地域の実態や特色を踏まえたオリジナルカリキュラムを作成・実践している。

令和5年6月16日
我孫子市小中一貫教育により
第290号

TSUNAGU
小中への繋がりや協働の力

我孫子市教育委員会 小中一貫教育推進室

我孫子市が小中一貫教育で目指す子ども像

- 「ふるさと我孫子」を愛し、誇りに思う子ども
- 確かな学力を身につけ、夢を持ちチャレンジする子ども
- 自分に自信を持ち、自己を大切にすることも

我孫子市が小中一貫教育で目指す子ども像

「ふるさと我孫子」を愛し、誇りに思う子ども
「確かな学力を身につけ、夢を持ちチャレンジする子ども」
「自分に自信を持ち、自己を大切にすることも」

「ふるさと我孫子」を愛し、誇りに思う子ども
「確かな学力を身につけ、夢を持ちチャレンジする子ども」
「自分に自信を持ち、自己を大切にすることも」

Abi-ふるさととの共有授業実践の様子を紹介するうな～！

Abi-ふるさと「ふさカリキュラム」

6月9日に布佐中学校で3学年同時展開のふさカリキュラムが行われました。

1年生は布佐の語り部を招いての学習をしました。屋台方式で6人の語り部さんのお話を聞きました。「観音堂はなぜ建てたの？」「岡田博士の人間像」「布佐の洪水」「朱鷺の歴史を調べ！」「布佐文庫とはなにか？」「竹内神社にある英文石碑のなぞを調べ！」と、自分が生活している布佐の町について、詳しく知ることができました。

2年生はフィールドワークで学んだ「洪水被害」「布佐文庫」「英文石碑」についてまとめました。不足している情報はインターネットで調べます。まとめたものはグループで共有し、ホワイトボードに書いて全体でも共有しました。

3年生は、1・2年生で学習したことから、「布佐のまちを発展させる方法」について提言書を作成しました。最初はグループでアイデアを出し合い、その中から、グループで1つ提言をまとめて出しました。「布佐を気象学のまちにする」「古民家カフェをつくる」など、学習したこと生活しながら中学生らしいアイデアが教室の中で溢れていました。

Abi-ふるさと「ふさカリキュラム」

6月13日に布佐南小学校の第3学年で、「ふさの町はどのように発展していったのだろうか」をテーマに学習しました。毎時間、学習したことを川柳にまとめ、発表します。

まず、前時の復習です。鏡子で水揚げされた魚や材木が利根川の水運を利用して高瀬舟で運ばれていたこと、材木を陸揚げした地点が現在の木下であり、魚は布佐で陸揚げされていたことなどを川柳で再確認しました。（例）「魚はこぶ 馬車と船で 5日間」

続いてワークシートを使って学習しました。黒板に貼られた先生お手製の「布佐の地図」を見ながら、陸揚げされた魚を馬で江戸に運ぶための鮮魚（なま）街道とそれにまつわる話を聞き、ワークシートを完成させていきました。特に、学校前の公園に馬を飼った馬頭観音があることを写真で確認したときなど、子ども達は意欲的で、先生の問いかけに我先にと答えている様子が印象的でした。

まとめとして、本時に学んだことを川柳で表現しました。子ども達は積極的に取り組み、あつという間に作り上げて先生に見せ、評価をもらいながら黒板の用紙に貼っていききました。

（例）「はかけ船 布佐でおりれば 江戸ちかい」

最後に全員が前に出て、川柳の発表をして授業は終わりました。1時間を通して子ども達は興味関心を強く持ち、意欲的かつ積極的に授業に参加できており、この後のフィールドワーク、そしてこれから中3まで続く「ふさカリキュラム」に大きな期待を抱くことができた授業でした。

上記記事は市の小中一貫教育モデル地区布佐中学校区で平成24年度に作成されたオリジナルカリキュラム「ふさカリキュラム」の実践の様子である。「地域学習」をコンセプトにカリキュラムで小中をつないでいる。総合的な学習の時間に、小3～中3までの6年間の合計26時間を1単元としている。連続した学びを行うためには、地域の力は欠かせない。CSの制度を活かし、学校と地域とが一緒になって中学校区の児童生徒を育てていくカリキュラムとなっており、「ふさカリキュラム」は今後開発を進める学校の指標となっている。

小中一貫校「長狭学園」の現状と今後 (黎明期から充実期へ)

鴨川市立長狭学園 鴨川市立長狭小学校 鴨川市立長狭中学校 校長 関口 和則 せきぐち かずのり

1 はじめに

生徒指導上の課題や学校の小規模化等の諸問題を解消し、一貫教育を行う中で、より効果的かつ効率的に生きる力をつけるべく、平成21年4月に「長狭学園」が開校してから15年の歳月が流れた。この間、コロナウイルス感染症によって、諸行事が縮小または中止を余儀なくされたが、開校以来続く一貫教育の理念と使命は、しっかりと受け継がれている。

開校時306名であった児童生徒数が、今年度は162名と大幅に減少する中、開校当初から続く『すべての子供の学びを保障する、校種・学年を超えた全員参加の学校経営』を合言葉に、すべての教職員が「長狭学園」の児童生徒の教育活動に携わっている。

2 小中一貫校「長狭学園」の教育

「地域の次代を担う活力ある『長狭っ子』の育成」が開校以来続く本校の教育目標であり、「ふるさと長狭を誇り、確かな学力と豊かな心でたくましく生き抜く長狭っ子」を目指す姿とし、小中全職員による一貫教育が展開されている。本学区は歴史的・文化的な遺産や豊かな自然に恵まれ、児童生徒の保護者の中には、都会からの移住者も多い。地域に学ぶ中でふるさと長狭の素晴らしさを知り、地域とともに歩む学校づくりを進めている。

(1) 9年間を通した一貫カリキュラムの実践

① 「かしこく・勤勉」＝確かな学力の育成

(ア) 教科担任制の効果的な運用

本校では、兼務発令によって全ての教職員

が小中での指導が可能となっている。また、可能な限り教科担任制を導入することで、教員の専門性を活かした効果的な指導を行っている。今年度は、数学科、英語科、理科、体育科、家庭科の中学校職員が小学校5年生以上（数学は6年生）で授業を実施し、小学校学級担任はT2として授業をサポートする。



小中職員が専門性を活かしたTTの実践
(左：小学校英語科、右：中学校社会科)

(イ) 一貫して取り組む学力向上推進計画

鴨川市学力向上推進計画の今年度の目標（課題を的確にとらえ、筋道を立ててよりよい考えを表現することができる）をもとに、今年度から、学習の終末において振り返り「わかば（わ：わかった、か：考えた、ば：ばっちり頑張った）」を書く活動を実施している。学習のまとめとともに書く力の向上を目指した活動を、9年間継続した活動とすることで、更なる学力向上を目指している。

※「わかば」は長狭学園の校歌の題名である。

② 「やさしく・至誠」＝豊かな心をはぐくむ

(ア) 日常的に歌声の響く学校づくり

小学部の教室からは「今月の歌」が各教室から毎日響く。中学部は1学期にミニコンサートを実施している。また、秋の若葉祭では、全校児童生徒（1～9年生）による合唱



コンクールや全校合唱等を保護者や地域住民に発表している。

(イ)思いやりとリーダーを育てる縦割り活動

1～9年生までの縦割り班を編成し、年間を通じて継続的・計画的な活動（春の全校イチゴ摘みや花いっぱい運動、七夕集会や全校レクリエーションなど）を実施。また、前期、中期学年による遠足や運動会での小学校応援団の結成など、あらゆる角度から児童生徒のリーダー性や可能性を広げる活動を実施。



ミニコンサート

七夕飾り集会

(2)校種・学年を超えた全員参加の学校運営

①「たくましく・克己」＝強い心と身体を育てる

(ア)隣接する国保病院と推進する健康教育

市立国保病院医師による健康教育（中学生を対象としたメディカルチェックや小児科医による定期的な健康相談）や職員研修（今年度は、アレルギーや低血糖に関する研修）を実施し、心身ともに健康な児童生徒の育成と職員の技量アップを図っている。

(イ)小中合同大運動会、部活動の早期参加

1～9年生が力を合わせて実施する大運動会、1年生の手を引き歩調を合わせて走る9年生の姿、5年生の秋から部活動体験入部を実施するなど、小中一貫校ならではの特色を活かし、強い心と身体を育てている。

②「長狭大好きな子・立志」＝長狭に学び、長狭を誇り、自立できる子を育成する

(ア)地域に学ぶ計画的・継続的な学習

豊かな自然、歴史的・文化的遺産の残る長狭を学ぶ、地域の力を結集した学園づくり。

伝統のしいたけ栽培（3年生）や米作り（5年生）、地域の魅力を発見する校外学習（3年生）や自然や文化遺産に触れる中期（5～7年生）遠足。地場産業を中心としたキャリア教育（6、8年生）の実施。



しいたけ栽培（駒うち）

米作り（田植え）

(イ)地域とともに歩むふるさと長狭を誇れる児童生徒の育成（学校運営協議会とともに）

開校当初から独自の簡易的な学校運営協議会制度を実施。地域に開かれた、地域と共に歩む学校づくりを推進している。地域ボランティアの方々による畑の先生や地域の協力によって行われるキャリア教育等、地域の方々に学ぶことで、ふるさと長狭を誇り、地域の次代を担う児童生徒の育成を目指している。

3 子供も職員も育つ今後の小中一貫教育

コロナウイルス感染症によって停滞を余儀なくされた活動を今年度から発展的に再開した。今後は、小中相互の学びを学園全体の学びとして捉え直し、教科領域を超えた乗り入れ授業の実施で、子供も職員も育つ長狭学園の一貫教育を実施していきたい。また、市内全校がコミュニティ・スクール化したことに伴い、地域とのつながりを、これまでの点から線や面とすることで、これまで以上に地域の教育力を最大限に活かした一貫教育を推進したいと考えている。子供たちを取り巻く全ての大人が、子供たちの幸せを願って推進する小中一貫校「長狭学園」の更なる可能性を求め、今後も全職員が一つになって前進していきたい。



社会関係資本とのチームで ワクワクする学校に

船橋市立金杉台小学校校長 たけもり まさと 竹森 正人



1 「チーム学校」を構成するのは誰か

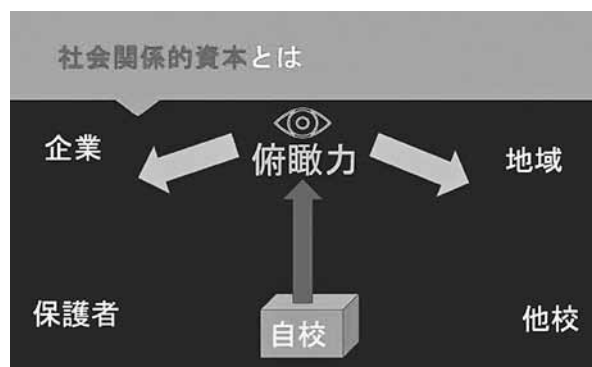
日本の若者の将来に対する意欲低下が危惧されている。日本財団「18歳意識調査（2024.4）」によると、「自分の国の将来についてどう思いますか」という質問に対し「良くなる」と肯定的な回答は15.3%（中国85.0%、イギリス24.6%）、「将来の夢を持っている」に肯定的な回答は60.1%（インド88.4%、韓国73.5%）といずれも調査6カ国中最下位という結果である。

その原因の一つは、学びのコミュニティが狭くなっていることだと私は考えている。本校も例外とは言えない。昭和46年の創立後、金杉台団地を中心に一時は1300人を超えた児童数も、現在はその5分の1、地域も高齢化している。近隣の金杉台中学校も令和4年度を最後に御滝中学校に統合された。

そんな環境だからこそ学校を、子供たちにとって将来がワクワクする場にしていきたい。それにはまず、子供たちの目の前にいる大人こそが今を生き生きと活躍している姿を見せていく。もっとも、子供たちにとって一番目の前にいる大人は教員なのだから。

「チーム学校」を構成するメンバーは、何も教員だけで完結しない。子供を取り巻く保護者・地域・そして企業が協働して子供たちの学びを支え、育てていく当事者であり、チームになれる。まず教員が、これらと主体的に繋がり、学校からもう少し高い視座で世の中を俯瞰し、社会と連携しながら学びをコーディネートしていく力をつける必要がある。

私はこれら学校を取り巻く社会的環境と関係性を、「社会関係資本」と捉えている。



本校は今年度からコミュニティ・スクールがスタートした。校外からの学校運営協議会委員は4名で構成する。少人数からのスタートではあるが、児童ホーム園長（地域）・高等学校校長（学校）・PTA会長（保護者）・IT企業社員（企業）と、社会関係資本の要となる人材でバランスよく構成できた。ITツールを使って学校のニーズと地域人材データをすり合わせていく「人材バンク」を作りはじめたところである。学校を取り巻く社会関係資本を繋げていく学校運営協議会委員はもちろん、彼らが繋げた人材もまた「チーム学校」のメンバーとなる。

2 学校と企業を繋げる

社会関係資本の一つである「企業との繋がり」。保護者や地域と比べて、繋がるには敷居が高いように思われるが、校長として以下のことを段階的に働きかけた。

(1)教員の社会関係資本を築く

文部科学省や教育委員会から紹介される協

力企業の情報等を得て、企業人材のもとへ足を運んだりリモートで対話をしたりする。校内の学びに生かせる情報を教員に共有し「種まき」をする。さらに以下のように企業との接点を段階的に設け、校内の「風通し」を良くしていった。

- ① NPO法人企業教育研究会から講師を招き、企業連携授業づくりの効果を事例を含めて紹介していただく
- ② 外部人材（映画監督）を講師に、一人一台端末を活用した映像表現実技研修を行う
- ③ 企業と共同計画した「1日企業体験プログラム」を本校教員が東京本社で受講する
- ④ 教員と企業のマッチングの機会を設け、人材及び技術提供を受ける

(2)社会関係資本チームとしての授業づくり

これまでも企業等には、一からお膳立てしてくれる「パッケージ型授業」を多く見かけた。内容もこなれていて子供たちも効率よく学ぶことができる良さはある。だが一方、教員は受け身になりがちである。

私は、教員と企業が育てたい子供の姿を共有し、学習内容について対話をし、協働的に学習設計し実践していくことが魅力ある授業づくりの大きな力になると考える。

本校の具体的な取組としては、5年社会科「情報」について、学年担任と日テレ報道局がリモート対話をしながら学習計画を進めた実践がある。教科書と睨めっこをしながら、教員は子供たちがおさえるべき基本的な知識を報道局のプロデューサーに要望した。プロデューサーもまた、ニュースを作る手順やスキル、注意点を教員に伝え、協働して学習計画を組み立てていった。

この学校と外部人材が共に授業づくりを行う関係こそが、まさに社会関係資本とともに創る「チーム学校」の関係である。面白かつ

たのは、メディア・リテラシーや知識習得の学びを日テレの元アナウンサーやプロデューサーが中心となり、ニュース映像づくりの実技は学級担任が中心となり学習活動を進めたことである。学級担任が映像制作の指導ができたのは、先に紹介した映画監督による職員実技研修において、インタビュー映像の撮り方を学んでいた経験も生かされたようだ。

(3)子供たちと社会関係資本が繋がる

子供たちはグループごとに制作した学校ニュース映像を日テレ報道局の方に見せながらアナウンスをした。最前線で活躍する現役のプロデューサーにたくさん褒めていただき、子供たちは大満足の様子であった。

この他にも本校の子供たちは、IT企業からドローンの操縦、舞台女優から卒業式で歌う歌の発声・表現の仕方等を教わった。それぞれのプロの方々からは自身の仕事観について語る時間も設けていただけた。

授業が終わると、授業者の周りに子供たちの人だかりができる。魅力ある大人と関わると子供たちの表情は変わる。また、子供たちの目の前にいる自分たちの担任の先生が、これらプロと関わり楽しい授業を実践していることから、魅力ある大人に感じられたのではないだろうか。

3 学校実態に合わせた社会関係資本の連携

教員が社会を広く俯瞰し、社会関係資本を身につけ、協働して授業をデザインし新たな学びを創造していく。保護者や地域人材は学校を取り巻く地域の規模に影響されることもあるが、企業人材についてはその制限はない。

学校の実態に合わせた社会関係資本で創る「チーム学校」によってワクワクする学びを実現することができる。そして子供たちにはそのワクワクした経験から将来ありたい姿を思い描けるようになって欲しい。



私の日々の実践（取組）

九十九里町立片貝小学校教頭 あお え 青江 ともふみ 智史



1 はじめに

本校は、九十九里浜のほぼ中央に位置し、自然に囲まれた温暖な気候の土地にある。学校の周りには、役場や公民館、郵便局、消防署等、町の中核施設が集中している。かつては、日本有数の「いわし」の水揚げ量を誇る片貝漁港を中心に半農半漁の町であったが、現在は自営業や会社員が多くなってきている。住民や保護者は、学校への思いも強く、何事も協力的である。明治6年に創設され、令和5年度、創立150周年記念式典を盛大に開催するなど、伝統ある小学校である。

2 私の日々の実践（取組）

教頭として2年目であり、力量が高いわけでもなく、特別に何かを行っているわけでもない。しかし、意識して取り組んでいることはあるので、紹介したい。

(1)職員からの相談への対応

職員室にいと「教頭先生、いいですかー。」と職員が声をかけてくる。その際に、気を付けていることは、やっていることを止め、目線を合わせて話を聴くことである。これは、私がお世話になった管理職が行っていて「忙しいのにしっかり話を聴いてくれる。」と嬉しかった経験からである。相談者は困っているから相談しているわけであり、丁寧に寄り添うことを大切にしている。また、相談内容に対して、なるべく、ティーチングではなくコーチングとなるようにしている。ここで大切なのは、相談者が相談しながら情報を整理することができるように促し、どう対処する

か自分で考えられるようにすることである。その促しを大切にしている。ただ、相談しやすい教頭かと言われるとそんなことはなく、職員からよく「忙しいのにすみません。」と言われる。気を遣わせてしまっている自分の行動を反省し、改善すべきだと考えている。

(2)気になる児童への対応

学校には様々な児童がいる。学級担任には、学級をまとめ良い方向に進めることと同時に、個に応じた指導が求められている。本校の職員は、児童に対して全力で指導・支援に取り組んでいるが、どうしても不安を感じたり悩みを感じたりする児童がいる。その児童をいかに支えるかが大切であると考えている。そのために、2つの取組を行っている。1つ目は、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの効果的な活用である。来校日ではなく、事前に1日の計画と気になる児童の情報共有を行っている。そして、来校日の放課後には、教頭、学級担任、養護教諭、スクールカウンセラーで話し合いの時間を設け、現在の状況、今後の方針を確認している。2つ目は、不登校気味の児童に対して、校長、教頭、教務、養護教諭を中心として、全職員で見守る体制をとっていることである。児童が落ち着く環境の提供と共に、教室に戻ることができるように声かけを行っている。私自身としては、学校の中で話しやすい存在になることで、色々な悩みを抱えている児童が心を開き、力を充電し、学級へ戻れるように努めている。また常に学級担任と連携し、関わりをもたせることを意識している。

(3)悩みを抱えた保護者への対応

教頭の大きな仕事の1つとして、PTAの運営がある。現在、全国的にPTAのあり方について色々と議論が巻き起こっているが、必要の有無ではなく、私個人としては様々な保護者と関わりをもつことができる良い機会と捉えている。実際、PTA活動時はもちろんのこと、来校した際や電話等で、多くの保護者と話をする機会がある。その中には、学級担任には言いづらい内容について相談してくる保護者もいる。その際に気を付けていることは、3点である。①しっかりと話を聴き理解する姿勢を見せること、②一緒に課題を解決したいという姿勢を見せること、③職員批判にならないように話を進めること、である。いかに批判から肯定、前向きな話し合いへとシフトしていくのが重要と考えている。

(4)朝の登校の見守り

朝の登校中、児童の見守りを行っている。元気に挨拶をする児童もいれば、暗い表情をした児童もいる。昨日元気だったのに、今日は泣いている児童もいる。様々な児童がいる中、何気ない会話から学級や児童の様子を知ることができる。また、保護者から困っていることを相談されることもあり、素早い対応が可能となっている。その他にも、多くの地域の方々と顔を合わせることになる。その際、意識して取り組んでいることがある。それは、地域の方が車で通過する際も、立ち止まって挨拶を行うことである。着任当初は、挨拶を返してくれる方は多くなかった。しかし、続けていると、挨拶を返してくれる方が多くなった。また、本校児童も横断歩道を渡った際、停まってくれたドライバーに会釈をすることができる。「片貝小児童は、会釈ができてすごいよね。朝から本当に気持ち良くなる。」という声をいただくことも多く、私の密かな自慢である。

(5)新聞記事の共有

朝、新聞を読むことから私の1日がスタートする。そして、読んでもらいたい記事を職員に共有するようにしている。1学期、共有した内容は、【県政150周年 九十九里手つなぎイベント】【大津波地震情報発信について】【九十九里町 3小統合協議】【不祥事関係】【コラージュ川柳 ことば遊び】等、様々である。教育関係の情報はもちろんのこと、地域の情報については、意識的に共有するようにしている。地域と共にある学校を目指しているからである。また、学校とは関係のない情報も共有することがある。これは、学校社会という狭い世界から視野を広げてほしいという思いからである。誰かが、何かの記事に出会い、考える機会が1つでも設けられれば良いと考え、今後も続けていきたい。

(6)提出物への対応

各方面からの文書を確認し、指示に従い報告することが教頭の仕事の1つである。ここで意識していることは、【すぐにやる】ということである。たとえ、締切日が1か月後であっても、取り組める内容であればすぐに報告するようにしている。これは、報告忘れを防ぐことと同時に、突発的な事案に素早く対応できるようにするためである。学校現場では、突発的な事案が多く発生する。その時に余裕を持って対応することができる状態を保つことこそ、危機管理であると考えているからである。

3 おわりに

校長のリーダーシップの元、職員が協力して教育活動を行うことができおり、幸せな教頭だと感じている。自分の力量を上げる努力を続け、引き続き、より良い教育活動を進められるようにしていきたい。



県立柏井高等学校の実践の紹介

県立柏井高等学校教諭 ^{み かみ あきら}
三神 陽

1 はじめに

教務主任に任命されてから現在まで、公立高等学校入学者選抜の一本化や新学習指導要領の実施など公立高等学校にとっては変化の激しい時期であった。また、新型コロナウイルス感染症が与える影響も大きく、職員間の連携や共通理解がより一層重要な時期でもあった。様々な変化への対応が求められる中、他校の実践を知ることは本校の抱える課題を解決するに当たり非常に重要だった。特別な内容はないかもしれないが何かの助けになればと思い、教務主任を務めてから現在までの教務部の取組を中心に、本校の実践の一部を紹介させていただく。

2 柏井高校教務部の主な取組

(1) Microsoft Teamsの活用方法の整理

「GIGAスクール構想」の理念に基づき、千葉県県立学校でもICT環境の整備が急ピッチで進む中、BYODネットワークの授業での活用を促進するために、まずは教職員がその有用性を理解し共通理解のもと運用される必要がある。本校でも「Microsoft Teams」（以下Teams）の活用方法を教務部が主導して整理し、職員間及び職員・生徒間の情報共有の効率化を図っている。本校では、令和2年に新型コロナウイルス感染症による一斉臨時休業の対応として、「Google Classroom」の使用を教務部から提案し導入していたため、翌年に全職員・生徒へMicrosoft365のアカウントが付与され、利用するアプリケーションが

Teamsへ移行した際も、スムーズに業務に導入できた。

Teamsについて、本校では「職員だけが所属するチーム」と「職員と全校生徒が所属するチーム」の2チームのみ設置し、各分掌や学年、委員会等はそれぞれのチーム内のチャネルとして設置している（構成については図1を参照）。職員はすべてのチームに所属することになるので、担当外の分掌や学年間の連絡もチャネルの表示・非表示を切り替えるだけで確認することができる。本校は大職員室が無く、職員が各教科の準備室などに分散しているため担当外の分掌や学年の動きが共有されづらい環境にあったが、Teamsの活用によって投稿する側の負担が増えることなく情報が共有されるようになった。

Teamsを活用し情報を共有できるようになったことで、会議等の在り方も大きく変化した。本校では、毎日行っていた全職員による朝の打ち合わせを原則週1回（月曜のみ）に減らし、毎朝の連絡事項はTeamsで共有するようになった。月に1度の職員会議も資料は事前にファイルで共有できるようになり、印刷の必要がなくなったうえ、事前に資料に目を通すことができるようになったので会議もよりスムーズに進行するようになった。

連絡事項や資料の共有にTeamsを活用することで、職員も生徒もTeamsを確認することが習慣化し授業等でも活用しやすくなった。令和5年度入学生からは入学時に1人1台タブレットを購入してもらっているため、

Teamsを含むMicrosoft365を各授業で活用し始めている。今後も教務部が中心となって、より効果的な活用方法を検討し提案していく必要がある。

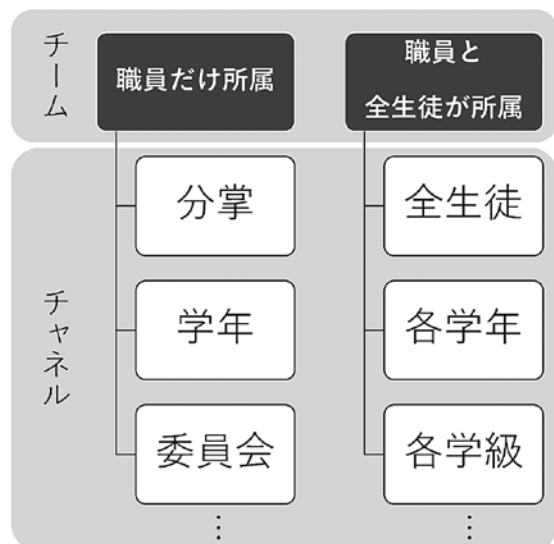


図1 チームとチャンネルの構成イメージ

分掌、学年、委員会間の連絡にはチャンネルを利用する。生徒が所属するチームも基本構成は同様に学級ごとのチャンネルなどを設置する。授業で活用する場合は機能の違いがあるためクラスのチームを作成する。

(2)公立高等学校入学者選抜に関わる業務

本校では学校長を中心に教頭、各分掌及び学年主任で組織される入学者選抜検討委員会を設置し、生徒募集や入学者選抜に関わる業務の検討を行うが、年間を通じて教務部は中心的な役割を担っている。学校説明会の案内文書や学校紹介等を近隣5つの市内のすべての中学校へ発送するため、教務部が主導し4月から資料準備を行っている。中学校からの質問や個別の訪問希望があれば同封の返信用FAXで連絡していただく方法をとったことで、多忙な中学校の先生方へより柔軟な手段で本校の情報を提供できるようになった。夏季休業中の学校説明会も部活動体験・見学会と合わせ5日間開催し、説明内容は動画にまとめホームページにも掲載している。秋には入学者選抜等の説明会に併せて授業公開も実

施しており、様々な方法で本校について知っていただく機会を設定している。また、本校は「海外帰国生徒の特別入学者選抜」や「外国人の特別入学者選抜」を実施しているため入学者選抜に関わる問合わせも多岐にわたり、個別の相談に応じるのも教務部の重要な業務になる。2月の願書受付以降はそれまで以上にミスが許されない作業が続くため、願書の受付から選抜結果の発表までをまとめた実施細目は年間を通して慎重に検討を重ねる。令和6年度入学者選抜からは採点の仕組みが大きく変わったが、教務部を中心に職員が一丸となって研修等に取り組むことで大きな変化にも無事に対応することができた。



図2 教務部主導の研修会の様子

3 おわりに

柏井高校教務部の取組についてその一部を紹介させていただいたが、県立高校の教務部の業務に限ってもこの数年で書き切れないほど様々な変化があった（教育課程や学習評価の方法、成績処理校務支援システムの導入…）。教務主任としてその対応に迫られる中で感じたことは、分掌や時に学校の垣根も越えて知恵を出し合えば、何かしら解決の糸口をつかめるということだ。ここに掲載させていただいた本校の実践がどこかで課題解決の糸口になれば嬉しく思う。また、本校の取組についてより良いアイデアがあれば、是非連絡をいただきたい。



授業を核とした学年経営 —協働的な学びの手法を取り入れた 授業実践を通して—

八千代市立村上東中学校教諭 すずき 鈴木 たつひで 辰英



1 はじめに

中学校生活を過ごす中で、部活動や行事が生徒にとっての思い出になることが多い。ただ、学校生活の中心は『授業』である。子供の問題行動の背景を探ると、学業上の不適応が関係している場合が多々ある。私が学年主任を務めた学年の生徒は、小学校時代に授業崩壊が起きていた学年だった。後述でもあるが、彼らの問題行動の背景には、学習の困難さが大きく関わっている。だからこそ私は、学年主任として学年経営をしていく中で、授業を大切にしていくことに重きを置いた。さらに、学校全体でも取り組んでいた協働的な学びの手法を取り入れた授業実践を重視していくことで、子供同士をつなぎ、どの子も取り残さない取組をしていくことが、学年をよりよくしていくのではないかと考えた。

2 小学校時代の実態

小学校時代の彼らの様子について5・6年時の担任から話を聞いた。一番大変だったのは小学校4年時で、担任の指示が通らないため、普段の教室でも拡声器を使って話をするほどだったという。特に数名の男子生徒が中心となって、授業の抜け出しや、空き教室への侵入を繰り返していた。特に印象に残っていることとして、授業中に抜け出した際に、特別教室に侵入し、コンテナに入っていたライターを使い、遊んでいたという話があった。ただ、このような問題行動の背景には、学習の困難さが関係しているのではないかと考え

ていたようだ。そのため、少人数対応で配置されている職員に個別で対応してもらっていたが、その職員と合わず継続することができなかった。また、周りの生徒も問題行動を繰り返し起こすことに対し、嫌気がさし、授業中にに関わり合うこともなかった。問題行動を起こす生徒はクラス内で人間関係をうまく作れていないため、昼休みにクラスでまとまって遊ぶ場面でも、問題行動を起こす生徒同士が集まり遊んでいたということだった。

このように、学習の困難さも関係し、彼らが周りから浮いた存在となり、問題行動へとつながっていったように感じられる。

3 日々の実践について

(1)主体的に学ぶ

学習指導要領において、児童生徒に育成すべき資質・能力を育むために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。授業に苦手意識をもっている生徒にとって、授業は他人事であり、興味関心が薄い。まずは、どの授業においても生徒に興味関心を持たせ、主体的に取り組める授業づくりを意識した。

社会科の授業では、単元の初めに必ずクイズを行う。それは、単元の導入を楽しめるようにということだけではなく、そのクイズで出てきた内容をその後の授業で深めていく。生徒からすると、漫画やアニメの「伏線回収」のような感じだ。そのように毎時間楽しめるような単元計画を作ることで、学習が苦手な

生徒の興味関心を引き出すことができる。

理科で行う実験の授業では、必ず一人一役実験での役割が割り振られる。誰かが進めてくれる実験ではなく、みんなで進める実験という意識を持たせ、どの生徒も授業に関わりながら主体的に取り組めるようにした。

私の数学の授業では「自分でもできる」という意識づけを大事にしている。自分にとって解決可能な問題であり、問題が解けたら「嬉しい」という感覚が主体的に取り組むうえで欠かせない。だからこそ、導入でどのような問題を扱うのかは特に意識している。「どうやったらできるんだ」「前回と何が違うんだ」といった疑問を多くの生徒にもたせ、授業に向かう構えをつくっている。

(2)仲間と学ぶ

日々の授業の中で「仲間と学ぶ」ということを重要視している。特にこの学年を育てるうえで仲間との関係性を構築していくことは欠かせない。だからこそ、日々の授業を『仲間との関係性づくりの場』としていくことは学年職員の共通意識としていた。

保健体育の授業では、『男女共習』を大切にしている。男女差がありそうな競技でも、一緒に取り組む。特に、バレーの円陣パスでは、生活班を活用し、男女が協力し合う場を意図的につくった。このような活動をしていくことで、日常生活から男女で取り組むことを当たり前にした。

授業や集会、短学活などどの場面でも大切にしていることが『仲間の話を聴く』ということである。特に国語のスピーチの授業では、クラス全員の前で発表する。そこでは、全員が『話を聴いてくれる』という安心感のある雰囲気づくりを大事にしている。そして、スピーチをよく聴くことは、仲間のことを知ることであり、仲間への関心を高めることにも

つながった。

私がグループ学習などをやっているときに特に意識しているのは「仲間に疑問を訊くこと」と「訊かれたときにはすぐに対応すること」である。できる生徒はよく自分から進んで教えようとする。それはそれで、大事なのだが、まずは、できない生徒が自分から「ここどうやるの?」と仲間に訊けることの方が大事だ。教えてもらうのを待つのではなく、主体的に学習に向かわせる姿勢をつくる。そして、訊かれた生徒は、自分が解いている途中であっても、すぐに教える。ここで、自分を優先し待たせてしまうと、できない生徒ができていない生徒のことを「終わるまで待つ」という仕組みができてしまう。授業内でのこういうことの繰り返しが、学年全体に、自分のことだけでなく、周りのことも考える姿勢や、できない自分も受け入れてもらえる安心感のある雰囲気をつくった。

4 終わりに

小学校時代に問題行動を起こしていた生徒の中から、部活動の部長、学級委員長や専門委員会の委員長、体育祭で集団を統率するリーダーなど、リーダーとして周りの仲間と協力して取り組む者が出てきた。ほとんどの生徒が同じ小学校からの進学で、人間関係を変えにくい環境ではあったが、小学校時代周りに浮いていた生徒が、周りから認められるような活躍をしている。本人の「変わりたい」という意識が根底にあることはもちろんだが、学年職員全体が、子供同士をつなぎ、どの子も取り残さない取組をしてきた成果だと思う。

これからも日々の取組を大切に、生徒の成長を支えていきたい。



生きた教材となる献立作成

佐倉市立和田小学校栄養教諭 **もり 森** **みき 美貴**



1 はじめに

本校は、開校114年、児童数38名であり、小規模特認校として佐倉市内全域から児童を募集している。佐倉市では、全小中学校を単独調理場方式で運営しており、本校も食数約60食ではあるが、校内に給食調理室がある。

2 給食を生きた教材として活用

栄養教諭の職務として、「食に関する指導」と「学校給食の管理」がある。この2つを一緒に行うことで、学校給食を生きた教材として活用し、効果的に食に関する指導ができると感じている。栄養バランスや旬、行事食、郷土料理について、給食を通して学習できるように、献立を作成している。本校では、毎日「ランチタイムズ」を発行し、児童はもちろん、教職員にも献立のねらいを伝えるようにしている。

また、食に関する指導全体計画を作成する際には、各教科との関連についても明記している。給食を授業の導入場面や主教材として活用したり、授業で学習したことを給食で確認したりすることで、楽しみながら「食」だけでなく「教科」の関心も高めることができるのではないかと考えた。今回は、給食から授業への活用ではなく、授業で学習したことを給食で確認した取組について紹介したい。

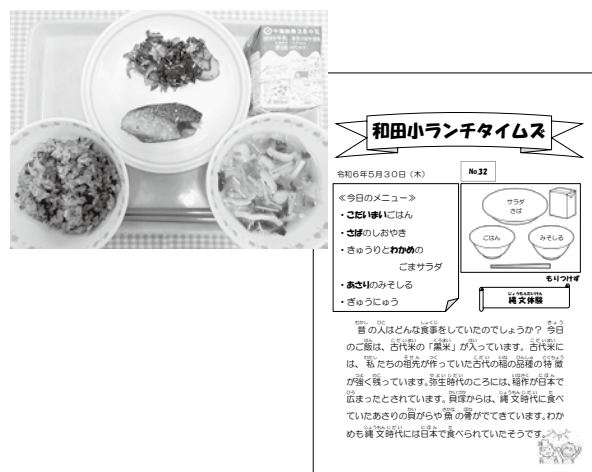
3 実践内容

(1)縄文体験

6年生社会「縄文のむらから古墳のくにへ」

の授業の中で、県教育庁教育振興部文化財課と市魅力推進部文化課の方をお招きして、火起こしや縄文土器について学習する「縄文体験」を行っている。当日の献立は、縄文時代を意識した献立を作成した。

- 古代米ご飯…古代の稲の品種の特徴が強く残っている黒米を使用
- さばの塩焼き…貝塚からひらめ、まぐろ、かつお、さばなど魚の骨が出土
- きゅうりとわかめのごまサラダ
…青森県の亀ヶ岡遺跡からわかめが出土
- あさりのみそ汁…貝塚からあさりやしじみ、はまぐりなどの貝がら出土



(2)田んぼの学習

4・5年生が総合的な学習の時間に「田んぼの学習」を行っている。地域の方の協力を得て、田植え、草取り、稲刈りを学校近くの田んぼで行っている。田んぼの学習の日には、ご飯の献立にし、「ランチタイムズ」で米の大切さや育てる苦労などを伝えている。4年生以上は、実体験したことを給食の時間に食

べながら思い出すことで、いつもより味わい、残さず食べようとする姿がみられた。また、収穫したお米は給食でも提供している。

(3)国語・音楽・その他

様々な物語や説明文の中には、食べ物や料理が登場することも多い。直接的に食に関する指導と結びつかなくても、食べ物や料理に対する関心を高め、同時に教科の目標を達成する手助けとなると考えている。

①2年生国語「さけが大きくなるまで」

3年生国語「うめぼしのはたらき」

鮭や梅干しを使った献立を提供し、「ランチタイムズ」では、教科書の内容を抜粋して知らせた。また、「さけが大きくなるまで」では、給食の時間に、鮭の実物大パネルを児童に見せて、鮭の大きさを実感させた。

今年度、教科書が新しくなり6年生国語で「津田梅子」の伝記が掲載された。津田梅子の父、津田仙は佐倉藩出身であり、日本に西洋野菜を広めた人物として「佐倉学」でも取り上げられている。今後、津田梅子、津田仙に関連した献立も提供していきたい。

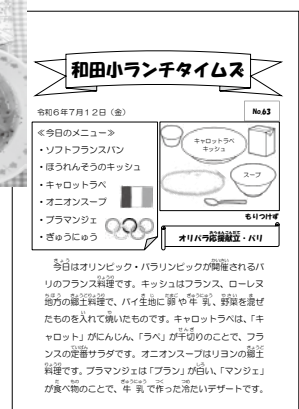
②5年生音楽「こいのぼり」

給食では、行事や旬を意識して献立作成を行っている。その時期や季節に合った曲を音楽で学習していることも多い。行事に関連した給食の日には、運営・放送委員会の協力を得て、その時節に合わせて選んだ曲をお昼の放送で流してもらっている。こどもの日献立では、2種類の「こいのぼり」を流した。他にも、「茶つみ」「たなばたさま」「うれしいひなまつり」や、魚料理を提供する日に「おさかな天国」を流している。

③その他（世界の料理）

今年の夏に、フランスのパリでオリンピック・パラリンピックが開催された。応援献

立として、フランスの料理の提供を考えている時に、3年生道徳「ライラックのさく庭で」の中に、キッシュやガレットなどフランスの家庭料理が登場することを知った。そこで、給食では、オリンピック・パラリンピック応援献立として、キッシュを提供した。3年生の児童は、キッシュが出たことを喜んでいた。



世界の料理を提供する際は、教科書でどのような国を取り扱っているかも参考にしている。昨年度2月には、6年生社会「日本とつながりの深い国々」で登場するアメリカ、中国、韓国、サウジアラビアの料理を提供した。児童は、どのような料理なのか当日の献立を楽しみにしていた。

4 おわりに

給食が生きた教材となるためには、おいしい・魅力的な給食を欠かすことができない。調理員と力を合わせて、安全でおいしい給食作りをしていきたい。そして、今後も担任や職員の協力を得ながら全体計画を作成し、献立作成に生かしていきたい。楽しい給食の時間が、児童の生きる力の育成につながることを願っている。



チームを意識した 事務職員としてのかわり

流山市立おおぐろの森中学校副主査 ねもと 根本 はやと 隼人



平成27年12月21日の中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」が、チーム学校といわれるようになった始まりと記憶している。

「この答申が出る前の学校は、チームではなかったのか？」

こんな意地悪を言う仲間がいたが、チームとは何か考えるよい機会になった。

●目標を共有すること

●それぞれに役割があること

この2つが、チームであるために不可欠なことだと考える。野球でいえば、勝つためにピッチャー、キャッチャーなど、それぞれがその役割を果たすこと。学校でいえば、校長の経営理念、学校教育目標を達成するために職種ごとの専門性を発揮することであろう。

では、事務職員の専門性とは何か。「事務職員は、事務をつかさどり（学校教育法第37条14号）、学校組織における唯一の総務・財務等に通じる専門職」といわれるとおり、経営資源である「ひと」「もの」「かね」「情報」すべてにおいて他の職種とは違った視点をもっている。特に「かね」は、事務職員固有の業務である。学校内外にある資源の発見やその活用方法など、事務職員だからこそできることは多くあると考える。

一方で、事務職員は原則1校に一人だけである。事務職員の経験等によって、学校ごとの事務機能に差が生じることは望ましくない。そこで、共同実施（共同学校事務室）というしくみがある。複数の学校で連携し、学校事務を効率的に行うこのしくみを、ぜひ活用してほしい。

チーム学校には、教員の負担軽減（子供と向き合う時間の確保）も期待されている。だからといって、これまで教員が担っていた仕

事を事務職員が担えばよいかという違う。「餅は餅屋」というが、職種ごとの専門性を明確にしたうえで、この仕事はどの職種が担ったほうが良いか、仕分ける必要がある。

最後に、自分の実践をいくつか紹介する。

1 学校ホームページ

日中に作業する時間を確保しやすい事務職員が関わることで、迅速な更新を行えた。事務職員にとっても、学校の様子が以前より把握できるようになり、気づきにつながった。

2 就学援助

保護者は学級担任に金銭面の相談をしにくいという課題に対して、事務職員が申請や問い合わせの窓口になることで改善を図った。

3 転出入

学級担任等への声かけや関係書類の集約、学校とのやりとりなど、事務職員が進捗を管理することで、より確実な手続きになった。

4 教科書

事務職員が教育委員会への報告や学校にある教科書の管理を担当し、教員が生徒への配付や回収などを行うというように役割を分担したことで、得意分野を生かす分業体制が確立できた。

すでに担っている業務についても「事務職員の専門性」「事務職員だからこそ」という視点で関わりを見直すことをお勧めしたい。

答申が出てからまもなく9年。事務職員の実践には、どのような成果があったのか。好事例を共有し、広まることを期待する。



「毎日の生活と健康」 ～自分の体調を伝えてみよう～

とう か ぎ
市川市立稲荷木小学校養護教諭

いしはら あき こ
石原 晶子

1 はじめに

本校は創立68年目を迎え、「やさしく・かしこく・たくましく」を学校教育目標とし、主体性を育てる教育を推進している。

市内小学校で唯一の「きこえの教室」があり、授業の情報保障のため、通級児童に担当教諭が、決められた時間に付き添っている。

2 毎日の生活と健康

「命や健康であることを大切にする子」をめざす児童像に掲げ、学校保健活動に取り組んでいる。今回は、3年「毎日の生活と健康」の保健指導の実践を紹介する。

学習のめあてを「どうしたら、毎日健康にすごせるのか考えよう。」とした。

パワーポイントのスライドを大型掲示装置に写し、児童に「健康とは何か？」を考えさせた。健康とは、「こころ」や「からだ」の調子が良いこととした。

次に、児童の発表から、健康に過ごすために大切なことを3つにまとめていった。

- ①生活リズムを整える。
- ②からだをせいけつにする。
- ③生活かんきょうを整える。



図1「手洗い」

3 自分の体調を伝えてみよう

健康観察で自分の体調を伝えているが、その理由も考えて、隣同士で伝え合ってみる。

「今日の具合はどうですか?」「昨日より元気です。よく寝たからです。」等々。

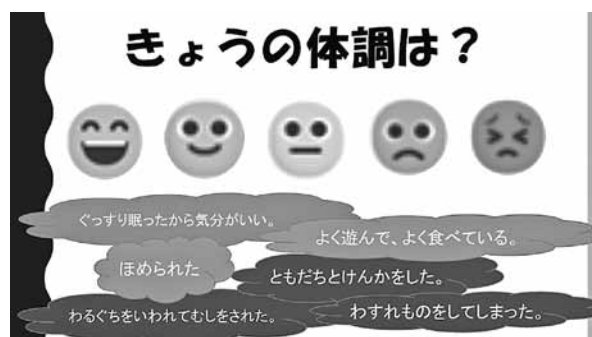


図2「5つのアイコン」

次に、タブレットを使って自分の体調を伝える。Microsoft Teamsのリフレクト機能を使って、表示された5つの表情のうち、今の体調に合ったアイコンを1つ押して、先生に送信する。自閉症傾向の児童や、緘黙傾向の児童も参加することが出来た。また、聞こえづらさにも配慮できた方法だった。

4 おわりに

自分の体調を、先生や友達に伝えられることが大切と思い、授業の最後に取り入れた。

リフレクト機能を使った方法は、難聴の通級がある中学の養護教諭が作り、小学校でも実践してみた。また、ICT支援員の方の援助があり、指導することができた。

指導後のアンケート調査から、健康観察で、児童も教員も、健康状態への興味関心が上がった様子が見られて良かった。今後も、他の教職員の方々と連携しながら、保健指導を進めていきたいと思う。

国語

社会を認識し思考する力を育てる語彙指導

- 継続的に語彙に目を向ける指導を基盤として -

松戸市立第四中学校教諭 ^{にしばやし} 西林 ^{さき} 沙紀

自分の考えをもつことができない生徒が増加していることに課題を感じ、生徒の語彙が豊かになれば思考力・判断力・表現力等が向上すると考えた。そこで、第1学年を対象として、継続的な言葉への興味関心を育てるために国語科通信の活用等を基盤とし、語彙を通して社会的事象を認識できる一人一台端末を活用した投書づくりの活動や思考力を育成するための語彙を他教科の言語活動で運用する授業を構想し実践を行った。その結果、投書は、社会的事象に使用されている語彙を用いて生徒同士の意見交換ができるようになった。さらに継続的な指導により生徒の使用語彙が増加し、実生活でも活用され、思考が深化している様子が窺えた。今後は、学校全体のカリキュラムへ発展させるため、他の教科・領域等との連携を図っていきたい。

社会

責任ある意思決定を行う自立した市民の育成を目指す社会科学習

- 地域の在り方を批判的に捉える対話的な学びを通して -

柏市立松葉中学校教諭 ^{はだち} 波田地 ^{しょう} 翔

大きく変動していく社会において、主体的に社会と関わりながら責任をもって行動を決めていく、自立した市民の育成を目指し、地域の課題に対する選択・判断を行う検証授業を第2学年地理的分野「地域の在り方」の単元で行った。その結果、批判的な吟味・検討や他地域による実際の参加行動を分析する地域の在り方を批判的に捉えた多様な他者との対話的な学びにより、中学生の自分も市民の一人としての視点から考え、感情や好みを抑制し、根拠を明確にした合理的な選択・判断へと調整しようとする生徒の変容が見られた。社会科として社会認識を閉ざすことなく多様な選択・判断を保障し、自立した市民を育成していくには、本研究で実践した批判という方法を取り入れていく必要があるであろう。

社会

地域教材を活用し、郷土への誇りを育む歴史学習の在り方

- 博物館の資料をもとに中央史と上総の国の関わりを学ぶ活動を積み重ねて -

県総合教育センター研究指導主事（前市原市立牛久小学校教諭） ^{さいとう} 齊藤 ^{まさ} 雅人

社会科の学習において、学習者の身近にある地域素材を取り扱うことは有意義なことである。しかし、小学校の歴史分野では人物学習を中心に行うため、地域にある歴史遺産を教材化して活用することに抵抗を感じている先生方もいるのではないだろうか。本研究では歴史の学習において、どこか一つの単元ではなく、年間を通して複数の単元で地域教材を活用することで、児童に地域への誇りを育ませることを目的として実践を行った。成果物は博物館と連携をして県内外にある博物館資料を授業で活用できるよう精選しているので、市原市や千葉県にある歴史遺産に興味をもって地域教材として活用していたければ幸いである。今後も教材研究を重ね、地域教材活用の重要性和楽しさを発信したいと思う。

算数

自分なりの結論の妥当性について批判的に 考察する力を高める学習指導

-統計的探究プロセス(PPDACサイクル)の実現を目指して-

市川市立二俣小学校教諭 しば た まさゆき 柴田 政之

「データの活用」領域において、児童が統計データを基に出した結論が妥当か、批判的に考察する力を育成することが求められている。このことについて、学習指導要領の解説では指導の方法が示されているが、より具体的な授業について提示することにより「データの活用」領域の学びの深まりにつながると考えた。そこで本研究では、先行研究から批判的に考察することの定義や構成要素を明らかにし、それらを基に授業を構想し、第6学年「資料の調べ方」の単元で実践した。児童のワークシートの分析から、授業を通して、児童が自分なりの結論の妥当性を批判的に考察することができたことが明らかになった。今後は、研究の成果を地域に広めたり、課題となった点について研究を進めたりし、より多くの児童が自分なりの結論の妥当性を批判的に考察する力を高めていくことができるよう尽力していく。

音楽

一人一人が思いや意図をもち、表現を高めていく 学習指導の在り方

-協働しながら音楽づくりをすることを通して-

鋸南町立鋸南小学校（前館山市立神余小学校）教諭 さんぺい のぞみ 三幣 望未

「個別最適な学びと協働的な学び」を通して、小学校音楽科での学習指導の在り方を明らかにしたいと考え、5・6年生「和音の響きを感じ取って表現しよう」の題材において協働を取り入れた音楽づくりの実践を行った。児童一人一人に個別の指導目標を立て、ICTによる可視化やワークシートの工夫などにより音楽の構造についての理解を深めながら、協働を意図的・計画的に取り入れた。その結果、新たな気づきを得て表現を高める様子が見られ、充実した協働的な学びは、一人一人の思いや意図に還元され、学びを深めることに有効であることが分かった。今後は、地域の研究会等を通じて他校にも実践を広めながら、本実践で明らかになった協働的な学びの有効性を他領域でも活用していきたい。

体育

体育ポートフォリオを活用したゴール型ハンドボール学習の研究

-児童に自己の伸びを実感させる手立てに着目して-

長生村立八積小学校（前茂原市立萩原小学校）教諭 ながの かずや 永野 和哉

これまでの実践では、どの児童にもボール運動においての一定の技能向上が見られたが一方で、単元後の「できる」の実感につながらない課題があった。そこで本研究では、中学年ゴール型ハンドボール学習において、体育ポートフォリオを活用した学習過程を取り入れ、授業実践を行った。児童が記述した体育ポートフォリオの単元前後の変容から、自己の知識・技能の向上を実感できた様子が確認された。診断的・総括的授業評価の各因子の数値やボールを持たないときの技能に有意な向上が見られたことから、体育ポートフォリオを活用した学習過程が児童の学習成果を促進する有効な手立ての一つであることが確認された。今後、他単元での実践やデジタルポートフォリオへの転換を進めていきたい。

外国語

中学校へつなぐ書くことの指導

-個に合った文字指導と小中連携による言語活動を通して-

茂原市立本納小学校教諭 ささき あきこ
佐々木 有紀子

外国語による小学校から中学校への、音声から文字の学習への円滑な接続を目指した。そこで、児童が書くことを楽しみ、速く正確に文字を書いたり単語や文を書き写したりする力を育成するため、小学校6年生の外国語科の授業において、文字指導の帯活動と小中連携による書くことの言語活動を設定し、その効果を検証した。児童が書くことにおける自分の課題を見つけ、自分で取組を選択できる文字指導と、同じ中学校区の小中学生との手紙のやり取りを行った。その結果、児童の書くことに對しての意欲が向上し、習熟度によって書く速度または正確性を向上させることができた。今後、高学年の2年間を通して継続的に取り組める文字指導の開発や児童生徒が学びをより深められる連携を目指す。

特別活動

児童のエージェンシー発揮を支援する特別活動

-AARサイクルの獲得を目指す学級活動を通して-

浦安市立見明川小学校（前船橋市立高根台第三小学校）教諭 ごとう りつこ
後藤 律子

近年、若者の社会参画に対する意識の低下が社会問題となっている。これは、特別活動において育成すべき資質・能力である「社会参画」にも関係するのではないかと考えた。そこで、本研究では、児童が、見通し、行動し、振り返るAARサイクルを習得し、エージェンシーが発揮できるような授業を開発し、その成果と課題を明らかにすることを目的とした。AARサイクルを軸とした話し合い活動の実践計画を作成し、異年齢交流活動を設定した。そして、アンケート調査を実施し効果測定を行った。結果として児童は、活動を行う中で、見通しや振り返りを通して、改善に向けて行動する意識が高まった。今後は、児童が自ら課題を設定しAARサイクルを往還できるような授業開発をしていくことが課題となる。

生徒指導

援助希求的態度を育成する生徒指導の実践

-開発教材による授業実践と児童理解を深める校内研修を通して-

旭市立飯岡小学校教諭 すずき しんや
鈴木 信也

自己の状態に応じて適切に援助を求める力「援助希求的態度」は生きていく上で重要な力である。小学校における援助希求的態度の効果的な育成を目指し、授業実践と校内研修を行った。授業実践では映像教材を開発して、在籍校の小学校1～6年生の児童を対象に担任と連携して学習指導を行った。校内研修では様々な年齢層の教職員が児童理解を深めるためにSOSサインを共有する取組を行った。その結果、児童は悩みの対処について理解を深め、相談する意識が高まった。教職員も研修を通して児童理解が深まり、援助希求的態度をチームで受け取ろうとする意識が高まった。本研究で開発した教材や校内研修での実践を研修会等で他校にも広め、援助希求的態度のよりよい育成に努めていきたい。

**病弱・身体虚弱
重度・重複障害**

病気療養児の復学を見据えた 病弱特別支援学校と小学校の連携 -事例の検証を通して-

県立仁戸名特別支援学校教諭 さいとう 齋藤 みずほ 瑞帆

病気の子供たちに対する実践を積み重ね、入院期間の短期化・頻回化や、各校のICT活用の推進、病気の子供たちを取り巻く環境の変化を感じてきた。入院期間も地域の小学校等とのつながりを維持することは、病気の子供たちの心の安定とスムーズな復学につながると考える。このことから、病弱特別支援学校と小学校等が連携しながら適切な指導支援を行う方法を明らかにするために研究を行った。病気の子供たちとその保護者、小学校教員のそれぞれの立場で抱く課題や願いを整理し、指導支援の手掛かりを得ることができた。病気の子供たちの教育を担う教員の一助となるよう、作成したリーフレットを活用し、入院中の学習状況や、連携事例等を広く発信していきたい。

特別支援教育課題

ユニバーサルデザインの視点を活用した 協働的な授業の探究 -全ての児童が学びやすい環境、指導方法とは-

船橋市立行田西小学校（前薬円台小学校）教諭 にしむら 西村 けいたろう 啓太郎

以前、様々なクラスに入って支援を行った際、「授業を行っている先生方、授業を受けている児童の双方が困難さを感じている」ということに気づき、自分にできることはないかと考えるようになった。本研究は、「ユニバーサルデザインの視点を活用した協働的な授業の探究」とし、学級担任が日々取り組むことのできる、六つの視点①焦点化、②視覚化、③パターン化、④自己選択・自己決定、⑤共有化、自立活動の視点から、⑥学び合い・支え合いを取り入れた授業モデルを作成した。今回は、第6学年の社会科「江戸幕府と政治の安定」、体育科「ゴール型ゲーム（バスケットボール）」で実践を行ったが、「全ての児童が学びやすい環境、指導方法とは何か」という視点をもって、今後も授業づくりに取り組んでいきたい。

企業派遣研修

企業におけるICTを活用した 地域連携と働き方改革

県立犢橋高等学校教諭 きんじょう 金城 たいき 太希

「ICTを活用した地域連携と働き方改革」をテーマに、研修を通じて得た知見を紹介する。教育現場でのICT活用の必要性を感じ、ジェフユナイテッド株式会社での企業派遣研修に参加した。同社のSNSやホームページを用いた情報発信の工夫や、地域との連携強化策を学んだ。また、ノートパソコンやオンラインサービスを駆使した業務効率化や、フレックスタイム制と在宅勤務による働き方改革の実践も目の当たりにした。この研究成果をもとに、学校教育におけるICT活用の推進や、教員の働き方改革に向けた取組の提案を行いたいと考えている。教育現場におけるICTの有効活用と、柔軟な働き方の導入について、ぜひ御一読いただきたい。

校内実践事例に関するポータルサイトの運営を通した1人1台端末の活用の推進

千葉市教育委員会事務局学校教育部教育センター指導主事（前千葉市立宮崎小学校教諭）

あかおか しゅんすけ
赤岡 俊輔



1 はじめに

GIGA スクール構想が始まって3年以上が経過し情報端末の活用自体は進んでいるものの、その活用の場面は教員間で差がある。GIGA スクール構想が本来目指す学習者主体となる活用の推進について、学校全体での取組を理論と実践の両面から学びたいと考え教職大学院に入学した。

2 研究の目的

本研究は、校内で教職員が学習者主体の情報端末の授業での活用・指導のイメージの共有を図ることを目的とし、昨年度の所属校においてポータルサイトの作成と運用を通じて実践事例の周知に取り組んだ。ポータルサイトを選択した理由としては、実践事例をイメージしやすく、非同期、分散型の情報共有が可能で、全ての教員が関わるからである。

3 研究の実際

ポータルサイトには、主として各学級での実践を筆者がまとめた「1人1台端末の活用実践事例」を載せた。

実践事例には探究的な学びの過程を意識した授業改善を行えるように、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現のどの場面なのかを明記した。また、学習者自身が探究的な学びの過程を進めていく際に、授業者の教員が意識して行ったことを「教師の役割」として明記した。

授業で使用した資料や指導案等は実践事例と共にリンクを貼って共有した。閲覧者が参考にし、すぐに利用できる形で提供することで、より活用・指導のイメージを共有しやすくした。

ポータルサイトに掲載した実践事例数の結果を表1に示す。

表1 学年・場面ごとの実践事例数

	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	特別支援	合計
課題の設定	0	0	0	5	7	5	1	18
情報の収集	1	2	1	4	6	4	1	19
整理・分析	0	0	3	5	5	8	1	22
まとめ・表現	3	4	1	2	8	6	1	25
合 計	4	6	5	16	26	23	4	84

実際に昨年度所属校で取り上げた事例は、4月から11月までで84事例となった。研究当初は情報の収集場面に活用が偏っていたが、実践事例の共有が進むにつれ、他者参照や協働的な学びを取り入れた整理・分析やまとめ・表現の場面で活用する事例が増加した。

4 研究の成果と課題

(1)成果

ポータルサイトによる実践事例の共有が、他学級への授業見学の代わりとして十分働くことや、校内でICTに関する情報共有の機会を増やすことに寄与する可能性が示唆された。

また、ポータルサイトの運営により、実践記録の閲覧や授業資料の共有が常に可能となり、教職員がそれぞれのタイミングで情報を得る機会となった。非同期、分散型の情報共有が可能となることで、イメージの共有の促進要因として働く可能性が示唆された。

(2)課題

今回の実践事例の発信は、筆者のみで各学級を見学してまとめたものであり、研究に取り組んだ期間では、実践した教職員自身の事例発信等、教職員による相互の取組の定着には至らなかった。教職員全員が主体的な関わりをもつような環境を作っていくことが今後の課題である。

地域連携を継続・発展させていく学校組織体制のあり方 ー福祉系高校に焦点をあててー

県立松戸向陽高等学校教諭 望月 玲子



1 問題の所在

現代の高校生にとって地域で学ぶことは、社会の中での自分の役割を探究するために必要であると考えられる。しかし、生徒や教員にとっては、地域との連携は必要なことであるとの認識は必ずしも高くはなく、地域との連携窓口は教頭が一手に担っている現状がみられる。

一方、専門学科ではその専門性の高さや勤務期間の長さ等の理由から学科主任が地域との連携の窓口を一手に引き受けている状況にあるため地域連携の窓口となっている学科主任や地域連携に意欲のある教員が人事異動等により変わることによって、それまで築かれていた地域との関係が途絶えたり、地域連携の目的が曖昧になって異なるものに変容する恐れもある。本研究では、専門学科である福祉系高校が組織として地域連携に取り組むための課題を明確にし、継続・発展させていくための組織体制のあり方を明らかにすることを目的とした。

2 研究の実際

本研究は、①地域連携の校内体制の現状を把握。②地域連携に係る組織体制について実態の解明。③所属校の地域連携の校内体制の現状と課題を整理し、先進校と比較検討する。④所属校の地域連携の校内体制の課題解決を試みる（実践研究）。の4つの段階で実施した。

地域連携は社会の要請や社会の教育的な責任に基づき学校教育の根底に位置付けられるものであり、地域連携を継続していくためには、地域を育てていく学校組織を形成する必要がある、調査から3つの方策を考えた。

(1)教育課程に地域連携を落とし込む

プロセスを経ないまま地域連携を進めることは、周囲との合意形成が不十分になり、学校組織としての協力体制が整わない状況に繋がり「学校組織が主体ではない」との認識になる。さらに、一教員の力量として捉えられ、教員としての資質として誰もができることとしての認知の変化を生まず、教員の孤立感を生み出し、負担感が増すことになる考える。

(2)地域連携のプロセスに生徒を入れる

本来、生徒は組織体制の一員ではなく、教育を享受する側であるが、享受する生徒だからこそ、地域連携を取り入れた学びを受けることによって、どのような力が身につくのかを評価する立場にあると筆者は考える。生徒はその学校に連綿と続いていくため、地域との活動を引き継ぎ、ブラッシュアップしながら継続していく。また、地元には卒業生も多くいるため、卒業生の声も取り入れることにより地域連携は引き継がれていくことができると考える。

(3)地域を育てる

地域で生徒を育てることの意義を地域住民に醸成し、「地域に必要な生徒であるから学校をサポートするんだ」という地域の当事者意識を育てるとともに、学校も教員が個人として関わるのではなく、校長のリーダーシップのもと組織として連携体制を整えることにより、そこに存在し続ける地域の力が保たれ、連携が途絶えることは起こりにくい考える。

3 おわりに

地域連携を継続していくためには「あの人だから」（個人）から「私たちで」というチームとして捉え直すことが必要だと考える。

未来を創る学び ー生成AIとICTが拓く教育の可能性ー

船橋市立飯山満中学校教諭 内藤 亮生



1 はじめに

2023年度後期より、本校は文部科学省のリーディングDXスクールとして、生成AI（ChatGPT）を教育現場に導入した。本校の研究主題は「自ら課題を見つけ、自ら学び、未来を創る力を身につけた生徒を育成する実践」であり、すべての生徒が「未来を創る力」を身につけられるような教育を目指している。この目標の達成に向け、生成AIを活用した最適な学習機会の提供と、協働しながら学びを進める環境の整備に力を入れている。

2 生成AIを活用した教育実践

本校では、生成AIを活用した授業が他校に先駆けて行われている。特に独自性が際立つのは、教員が研修を重ねて生成AIの面白さを生徒に伝える取り組みである。本校では年間8回の研修と2回の公開授業を実施している。外部からの講師を招いた研修会や、教科や経験を超えた探究グループの研修を重ね、日ごろから授業に関する相談しやすい雰囲気がある（図1）。生成AIは単なるツールではなく、生徒の学習意欲を刺激する新しい教育のパートナーとして活用されている。



図1 校内研修の様子

例えば、美術のデザイン作成授業では、生成AIを利用して抽象概念を言語化しアドバイスをもらうことで、生徒が自身の成果物を非常に分かりやすく言語化する力を身につける

ことができた（図2）。英語の授業では、スキット作成の際に生成AIを修正役として活用し、生徒が自ら創造力を発揮しながらも適切なフィードバックを得ることで、より質の高い作品を生み出している。理科では、生成AIを最適な学習の相談相手として活用し、生徒が自身のレベルに合った学習を進めた結果、単元テストの成績が向上している。数学の授業では、ChatGPTに「この問題にはどの解法が適していますか？」と質問することで、複数の解法を学び、効率的な問題解決能力を身につけることができた。家庭科では、生成AIを用いて幼児向けのデジタル絵本を作成する際、生徒がアイデア出しや構成の支援を受け、GIF形式の絵本を完成させた。

授業の成果物

タイトル「雨の日の楽しみ」

参考にした模様はヘイズリーで、同じ色を基本としているのにとろろカラフルな色があって一つの図形が一つの作品のように見えることや、不規則な配置をしながら今にも動き出しそうで流動的な作品に見えることも好きでこの模様を参考にした。

背景は青を基調として暗めの空を表し、ヘイズリー模様の主軸となる滑らかな青のしずく型で 雨粒を表現した。

雨粒の中に星のような形を入れたり、外側に 三角形やトゲトゲした図形を重ねて様々な雨粒を作ったり、背景に明るい色の図形を重ねる雨でもいいことがありそうと思えるような作品にした。

自分は正直雨が嫌いではないけど、いつも思っているけど、そんな雨の日でも希望を持って生きているといいなと思って作った。

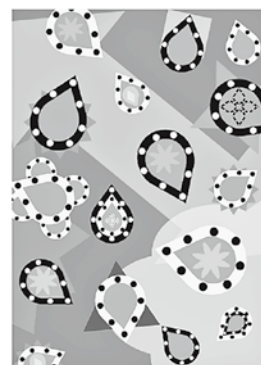


図2 生徒の成果物（コメント・デザイン）

さらに、生成AIを活用した学習をより効果的にするために、校内に掲示板を設置し、教員同士がプロンプトの利用方法を共有し合う環境を整えた。これにより、教員間での学びの広がりが促進され、横展開での活用が可能となっている。プロンプトの原案を作成し、生徒に利用させることで、個別最適な学びが実現されている。

3 現代の教育課題と生成AIの役割

本校では、生成AIを活用することで、教員不足や個別最適な学び、協働的な学びといった現代の教育課題に対応している。教員が生成AIを使って授業準備やフィードバックを効率化することで、教員が生徒一人一人に向き合う時間を確保しやすくなっている。また、生徒の学習ニーズに応じたカスタマイズされた指導を提供することで、学びの質が向上している。

さらに、生成AIは協働的な学びを促進する役割も果たしている。プロジェクト型の学習活動において、生成AIが各生徒の役割分担や進捗管理をサポートすることで、効果的なチームワークが実現されている。探究学習では、生成AIを用いて生徒が問題を発見し、解決策を探求するプロセスが支援され、より深く実践的な学びが展開されている。

4 中教審が示す次期ICT環境整備方針との関連

中教審が示す次期ICT環境整備方針において、1人1台端末の導入成果と課題が指摘されているが、本校ではその成果を最大限に活かすための工夫が施されている。生成AIを活用した授業実践が、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を図るための一助となっていることも明らかになりつつある（図3）。

また、道徳の授業では、生成AIを活用して授業プランや展開の相談を行い、時間配分や生徒の話し合い方のコツを得ることで、授業の質を高めている。進路学習では、面接や討論練習において生成AIが生徒へのフィードバックをサポートし、高い水準の進路指導を実現している。これにより、授業外の場面でも生成AIが教育活動全般を支える重要なツールとして機能している。このように校務支援として、教員の業務を支える効果も表れている。

5 これからの課題と展望

本校が直面している課題としては、生成AIを活用した授業のさらなる展開と、GIGAスクール構想に伴うネットワーク環境の整備が挙げられる。特に、生成AIの導入による教育の質向上と並行して、教職員のICTリテラシーの向上も求められている。さらに、本校では個別最適な学びの提供を重視し、全ての生徒が自分に最適な学びを進めることができる環境の整備が必要である（図3）。

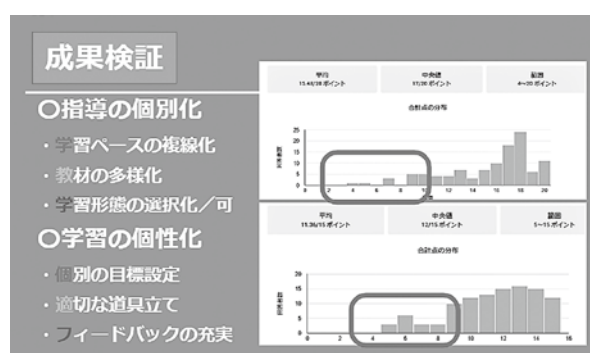


図3 単元テストの結果と目指したい学習環境

また、これまでの一斉授業の様式をそのままICT機器に置き換えるだけでなく、これらのツールに最適化された授業展開を目指したい。そのためには、授業内容や方法自体を見直し、ICTツールが持つポテンシャルを最大限に引き出す授業デザインが求められる。

今後の展望としては、ICTを駆使した教育のDX化をさらに推進し、生徒一人一人の学びを最適化するためのデザインを追求する。また、教職員、生徒ともに「ツールを使い倒す」発想の育成も目指している。ICT機器が常用化された中で、教職員の専門性が発揮されることで、教育や授業の質がさらに向上されるはずである。GIGAスクール構想の環境整備が進む中で、教員が持つ専門性とICT機器が融合した授業展開を実現し、未来を創る力を持った生徒の育成を目指していきたい。

開館50周年記念特別展 「浅井忠、あちこちに行くーむすばれる人、つながる時代ー」 令和6年10月30日（水）～令和7年1月19日（日）

県立美術館

近代洋画の先駆者として知られ、日本画や工芸、図案など多様な分野で活躍した浅井忠（あさいちゅう）（1856－1907）。昭和49（1974）年の開館以来、千葉県にゆかりのある浅井の作品収集及び調査研究に努めてきた当館は、約200点の作品と約1,500件の関連資料という日本有数の浅井忠コレクションを有している。今年、当館が開館から50周年を迎えることを記念して、これらの作品・資料とその研究成果を紹介し浅井の人物像に迫る展覧会を開催する。

1 浅井忠（あさいちゅう）とは

安政3（1856）年、江戸の佐倉藩邸に生まれ、7歳で佐倉・将門町（現・佐倉市）に移り黒沼槐山に日本画の手ほどきを受けた。17歳で上京して日本初の官立美術学校である工部美術学校でフォンタネージに本格的な西洋画を学び、その同級生を中心メンバーとして日本最初の本格的洋風美術団体「明治美術会」を組織した。

東京美術学校教授就任後、西洋画研究のため2年間渡仏。明るい色彩で季節感豊かな作品を制作した。

帰国後は京都に移住し、京都高等工芸学校の図案科で教鞭を執った。聖護院洋画研究所、関西美術院を設立し、安井曾太郎や梅原龍三郎を育てるなど後進の育成に積極的に関わり組むと共に、陶芸、漆芸図案制作に力を注いだ。京都の地で多彩な活動を繰り広げたが明治40（1907）年、病に倒れてその生涯を閉じる。門下からはその後の日本洋画壇を牽引する人材が数多く輩出されるなど、まさに人と時代の架け橋となった人物である。

2 展示と関連イベント

開館50周年を記念し企画された本展では、当館が所蔵する4つの日記－「筑波日記」、「従軍日記」、「巴里日記」、「フォンテーヌブロー日記」－を軸に、当館所蔵の浅井作品を一挙公開、他館からも作品を借用してご紹介する。さらに、工部美術学校在学時の練習用デッサンやフランス留学時代の句集『寒月・水仙』、浅井が様々な人と交換していた絵葉書や書簡といった貴重資料を作品とともに展示することで、その多岐にわたる活動に隠された人物像に迫っていく。



浅井忠《ナポリ》1902年、千葉県立美術館蔵

会期中には、本展覧会の図録執筆者による連続講演会を開催するほか、展覧会を家族で楽しむための館長によるファミリーツアーや、浅井が手掛けた図画教科書を実際に体験できるワークショップを実施する。さらに、「浅井忠日記資料デジタルアーカイブ」として、浅井の日記資料を地図と関連付け、見るだけで楽しめるアーカイブも公開している。

この秋、浅井忠の知られざる姿に出会える展覧会「浅井忠、あちこちに行く」にぜひお越しいただきたい。

開館30周年記念 令和6年度企画展 「見る ー生き物の目・機械の目ー」 令和6年10月12日（土）～12月1日（日）

県立現代産業科学館

生物の視覚システムは、膨大な情報を取捨選択し、補完しながら、見える世界を認識する非常に優れたシステムである。私たちはその「見る」ということを、ほとんど意識することなく行っている。

機械の視覚システムも驚くべきスピードで進化している。カメラや情報を処理する技術の向上、さらにはAIが登場したことにより、機械がまるで人のように情報を取捨選択し、補完された世界を見ることができる。生物と機械が協働して見るその先の未来は、果たしてどのような世界なのだろうか。

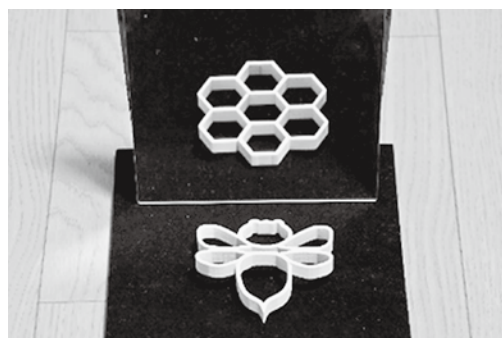
今回の現代産業科学館の企画展では様々な「見る」を紹介する。人の見え方や生き物の見え方のほか、電子顕微鏡・高感度カメラなど、人の目では見ることのできない機械の視覚技術にも焦点をあてる。また、人の目と機械・AIが共に認識する新たな見え方を紹介する。

本展で様々な「見る」に触れることで、新たな視点で世界を見直す機会を提供したい。

1 「見る」とは

脳は、立体物を見る際に、奥行きを自動的に補完し、推測して認識している。人はこれを意識することなく行っているため、普段の生活では実感することができない。

本展では、目の前にある物体と、鏡に映っている物体の見え方が違うという立体錯視の世界を体感できる展示により、普段何気なく行っている「見る」という行動を改めて意識してもらう。



作品「巣に帰る」実際の立体は手前のハチのような形だが、鏡に映った姿はハチの巣のように見える
協力：明治大学研究特別教授 杉原 厚吉

2 生き物の「見る」

生き物の優れた「見る」能力を紹介する。人間の「見る」能力では、伝統工芸品を制作する職人の見る技術、見えにくい人の「見る」世界について触れる。また、海の生き物などが見ている世界を体験するコーナーでは、あさりの巨大断面図などもあわせて展示し、「見る」に関する体の仕組みについても紹介する。

3 機械の「見る」

科学の発展によって進歩したミクロの世界を探究する技術を紹介する。産業や研究の現場で使われている顕微鏡や高速度カメラなどを展示し、機械の視覚システムによる見え方の違いなどを体験してもらう。

4 未来の「見る」

災害救助の現場で人・機械・AIが視覚を共有するシステムや、3Dホログラムによって自分の書いた絵が浮き出るシステムなど、最先端の技術を展示し、未来の「見え方」の可能性を紹介する。

【連載・県立高校の今】令和6年度 第3回 県立土気高校（保育基礎コース） 令和6年度再編校の紹介（令和6年度連載のおさらい）

県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室

1 はじめに

令和5年度の【高校NOW!】では、令和6年度から新たな学びが加わる学校の紹介や、県立高校を知る上で頻出する用語の解説を、年間を通して全6回掲載した。

今回は、令和7年度に新たに保育基礎コースを設置する土気高校の取組を紹介するとともに、令和6年度から新たな学びをスタートした学校（以下「再編校」という）の取組を改めて紹介する。

2 保育基礎コースについて

このコースは、小学校入学前までの乳幼児に対する保育や幼児教育に興味・関心を持ち保育士や幼稚園教諭等を目指す生徒が、その基礎的な素養を身に付けるとともに、夢や意欲、職業意識等を育むことを目的としており、これまでに3校に設置した。

保育士及び保育教諭などの保育・幼児教育を担う人材の確保が急務となっていることから、今後も、コース設置校の拡充などによる、担い手の更なる育成が求められている。

設置校	設置年度	設置学科
市川南	平成31年度	普通科
四街道北	令和2年度	普通科
鎌ヶ谷西	令和6年度	普通科
★ 土気	令和7年度	普通科

保育基礎コース設置校一覧

3 土気高等学校の取組

土気高校は令和4年10月に創立40周年を迎

えた千葉市緑区唯一の県立高校である。県の英語教育拠点校として、国際交流や国際理解教育に力を入れている。また、地域連携の取組も盛んであり、様々な活動を通して、何事にも積極的に挑戦する姿勢を育成している。

(1)保育基礎コース設置に向けて

土気高校では令和7年度入学生から保育基礎コースを設置する。設置に向けて先進校の視察や教育課程の検討、各種機関、大学等との連携・調整、広報活動等を行ってきた。

令和5年度からは千葉市こども未来局幼児教育・保育部幼保支援課や土気地域の私立保育園と連携し、夏季休業中に保育士体験を実施している。

- 令和5年度 9施設 21名で実施
- 令和6年度 8施設 23名で実施

各施設とも生徒の受入れに対して大変好意的に対応してくださり、生徒たちも意欲的に体験している様子がうかがえる。



保育士体験の様子

また、令和6年度は3年生の選択科目として保育基礎の授業を実施している。大学や短期大学で保育を担当されている教員を招き、高大連携の特別授業を数多く行っている。今後のコース運営にあたって、先駆けとなるよ

うな授業を既に実践している。

(2)保育基礎コースの概要

2年次から本コースを選択し、「保育基礎」(2単位)、「子ども表現Ⅰ」(2単位)を履修する。3年次には「子ども表現Ⅱ」(2単位)と「保育実践」(4単位)を履修し、2年間で10単位の保育に関する様々な専門科目を学ぶ教育課程となっている。

「子ども表現Ⅰ・Ⅱ」では、子供の表現活動と保育に必要なピアノ演奏・歌唱・折り紙・絵画等の知識・技術等を、実習を通して習得する科目である。

「保育実践」では、「保育基礎」や「子ども表現Ⅰ・Ⅱ」で学んだ内容を生かし、保育実習や課題研究に取り組むこととなる。



「保育基礎」の授業の様子

実習先としては現在、保育士体験で連携している施設の他に、地域の子育て支援センターとの連携も視野に入れている。また、全ての科目において、保育や教育に関する学科を設置している大学や短期大学の先生から学ぶ特別授業を実施し、専門性の高い学びを確保できるように計画をしている。さらに、授業での学びを基に、保育技術の向上を図るべく、保育技術検定取得も目標にしていく。

子供が好きで、将来子供と関わる職業(保育士・幼稚園教諭等)を目指そうと考えている生徒が、同じ志を持っている仲間と一緒に保育の基礎を学び、様々な体験をすることで共に成長し、自分の将来を明確にするコースとなっている。



保育基礎コース紹介ポスター

4 令和6年度から始まった学びについて

本稿で紹介する新たな学びは、令和4年10月に策定した「県立高校改革推進プラン・第1次実施プログラム」において計画されたものである。これに基づき、既存コースの設置拡充のほか、新たな人材育成系のコース設置や幅広い学びのニーズへの対応など、12項目18校の再編を行った。そのうち、令和6年度から新たな学びをスタートした16校を改めて紹介する。

紹介の前に少し紙面を割いて、本県の県立高校における「コース」について解説する。

千葉県では、入学志願は学科単位で行われるが、「コース」はその学科の下に置かれている学びの選択肢である。生徒は入学後に興味・関心に応じて、「コース」を選択することができる。

いわゆる「文系」「理系」は普通科という学科にある「コース」の一つと言える。

5 再編校の紹介

(1)地域連携アクティブスクール(行徳、市原)

設置校	設置年度
泉	平成24年度
天羽	
船橋古和釜	平成27年度
流山北	
★ 行徳	令和6年度
★ 市原	

地域連携アクティブスクール設置校一覧

地域連携アクティブスクールは、高校で心機一転頑張りたいという意欲を持った生徒を受け入れ、地域の教育力を活用し、自立した社会人を育成する学校である。

行徳高校では、これまで行っていた学び直しやキャリア教育に係る取組を、近隣の大学や地域等との連携により更に充実させる。

市原高校では、既設の学科・コースでの取組を生かして、多様な地域連携や実践的なキャリア教育を推進する。

(2)起業家育成に関するコース（千葉商業）

商業のスペシャリストや起業家精神を有する人材を育成するコースである。

千葉商業高校では、このコースを「アントレプレナーシップコース」として、アントレプレナーシップ教育の普及促進に取り組んでいる大学等と連携した学習活動やキャリア教育を展開する。

(3)観光に関するコース（一宮商業）

観光に関する知識や技術を習得し、観光ビジネスの未来を担う人材を育成するコースである。

一宮商業高校では、観光ビジネス従事者としての心構えやマナー、おもてなしの精神などを、企業と連携しながら学ぶ。

(4)保育基礎コース（鎌ヶ谷西）

保育士及び保育教諭など、保育系人材を育成するコースである。

鎌ヶ谷西高校では、平成30年度から行っている「保育の学び」の実績を生かし、保育園での実習や大学等との連携授業等により、次代を担う子供を育てることの重要性や喜びを感じることができる生徒を育む。

(5)教員基礎コース（国府台、成東、大多喜）

設置校	設置年度	設置学科
千葉女子	平成26年度	普通科、家政科
安房		普通科
我孫子	平成30年度	普通科
君津		普通科
★ 国府台	令和6年度	普通科
★ 成東		普通科、理数科
★ 大多喜		普通科

教員基礎コース設置校一覧

教員など、教育に関する人材を育成するコースである。

国府台高校では、近隣小学校での学習指導体験や高校生向け出前講座等など、生徒の漠然とした「夢」「将来へのビジョン」がより明確になるような取組を行う。

成東高校では、教育系大学との連携授業や小・中・特別支援学校での実習などを行い、履修・習得した証として「教員基礎コース修了証」を授与する。

大多喜高校では、地域との連携を生かして令和4年度から実施している「教育関係職希望講座」を更に充実したものとする。

(6)グローバルスクール（松戸国際）

設置校	設置年度
成田国際	平成27年度
★ 松戸国際	令和6年度

グローバルスクール設置校一覧

グローバルスクールは、世界を舞台に持続的発展に貢献できるグローバルリーダーを育成する学校である。

松戸国際高校では、海外姉妹校との交流やESD教育への取組など様々な教育活動を実践しているほか、外国籍や海外帰国生徒への日本語指導などの支援も一層充実させる。

(7)先進ITコース（袖ヶ浦）

世界中で加速するデジタル環境に対応できるIT人材を育成するコースである。

袖ヶ浦高校では、大学や専門学校、研究所

や一般企業等と連携し、プログラミングやデータ分析、AIの仕組みや活用方法を科学的に学ぶ。

(8)農業経営者育成に関するコース（茂原樟陽）

将来の農業及び関連産業の経営を担う農業経営感覚を有した人材を育成するコースである。

茂原樟陽高校では、このコースを「アグリマネジメントコース」として、経営感覚醸成のために学習内容の充実を図るほか、農業関係団体や大学・大学校等との連携した取組により展開する。

(9)医療コース（小見川）

医療従事者として、地域医療に貢献する人材を育成するコースである。

小見川高校では、医療への興味・関心を高めるために地域医療機関での数多くの現場実習を設定し、さらに国家資格取得のための大学等への進学をサポートする学習カリキュラムを展開する。

(10)理数教育の拠点校（船橋）

県全体の理数教育の充実を図るため、船橋高校を「理数教育の拠点校」とした。

船橋高校では、課題研究発表会などSSH事業を活用した大学等との連携や、理数科等設置校を地域の拠点とした小・中学校との連携強化など、高校、大学等、小・中学校間の連携を一層推進する。

(11)福祉教育に係るコンソーシアム（松戸向陽）

県全体の福祉教育の充実を図るため、松戸向陽高校にコンソーシアムを設置し、連携コーディネーターを配置した。

今後、「ふくしコンソーシアムちば」を中心に、産学官の相互連携による福祉教育の質の向上や、地域を支える人材の育成、福祉教育に関する理解促進や魅力発信に取り組む。

(12)総合学科（匝瑳）

生徒の多様な進学希望に対応し、キャリア意識の高い人材を育成するため、匝瑳高校の普通科と理数科を改編し、総合学科を設置した。

進学を重視した総合学科として4つの系列を設け、生徒の学びの目的を明確にさせるための探究の充実や、大学進学後を見据えた社会に通用するための選択科目など、教育内容の一層の充実を図る。

〈4つの系列と学習内容〉

①PEACHキャリア系列

普通科における「文系」よりも、専門的な科目選択が可能

②STEMキャリア系列

普通科の「理系」に加えて、理数教科の発展的な内容の科目選択が可能

③国際ブリッジビルダー系列

中国語・韓国語・フランス語・スペイン語の履修が可能であり、海外短期留学を推奨

④360°キャリアビルダー系列

文系・理系にとらわれない幅広い科目選択が可能

(13)通信制協力校（銚子商業）

通信制協力校	実施年度	学校所在地
館山総合	平成29年度	館山市
★ 銚子商業	令和6年度	銚子市

通信制協力校一覧

千葉大宮高校から遠距離に居住している生徒の通学時間や交通費の負担軽減につなげるため、居住地の近くで通信制の授業を受けられるよう、銚子商業高校を通信制協力校に指定した。

銚子商業高校では、すでに通信制協力校となっている館山総合高校と同様に、スクーリング（年間16回）や定期考査を実施している。

主体的・対話的で深い学びを目指した授業づくり ～児童生徒一人一人に合わせたICT機器の活用～

県立千葉特別支援学校教諭 のむら ゆみこ 野村 裕美子



1 本校の研究について

本校は、千葉県教育委員会の指定を受け、本研究に2年間取り組んだ。本研究では、児童生徒一人一人に合わせたICT機器の活用について具体的に検討したり、授業実践を報告し合う会を設けたりすることで、ICT機器を利活用して学ぶ場면을効果的に授業に取り入れ、「主体的・対話的で深い学び」の実現につなげることを目的とした。

2 ICT機器を活用した授業づくり

ICT機器の活用に関して、実態把握から活用場面、活用のねらい、学習内容を検討し、「実態表」にまとめた。

(1)学習意欲と理解度の向上（主体的な学び）

イラストや写真、動画の活用、背景の色分け等の視覚情報の工夫をすることで、学習内容が理解しやすくなった。特に動詞の学習では、タブレットと音声ペンを組み合わせ、動画を見て確認できたことで、より理解が深まり、自分から繰り返し学習に取り組もうとする姿が見られるようになった。

(2)子供同士のかかわりの増加（対話的な学び）

朝の会や帰りの会では、タブレットや音声ペンを活用し、児童生徒が一人で司会進行を行えるようにした。既存の進行カードと組み合わせることで、タブレットに表示されたイラストの意味等もスムーズに理解することができ、これまで教師が担っていた役割を自ら行い、友達に依頼したり、かかわろうとしたりする姿が増えた。課題学習では、プログラミングカーを活用した集団学習を行った。プログラミング的な思考の深まりだ

けでなく、友達と話し合ったり役割分担したりする様子も見られた。また、コミュニケーション手段の一つとしてタブレットを活用することで、相手に伝わったことが明確になり、自分から写真等を選択してやりとりすることが増えた。このように、意図的な場面を設けICT機器を活用したことで、自己選択・自己決定の機会が広がったり、物を介した子供同士のかかわりが増えたりし、対話的な姿が見られるようになった。

(3)自己の課題に気づき次の学習につなげる（深い学び）

振り返りの場面では、動画や振り返りシートを活用することで、自己を客観的に捉え、課題に気付いて解決しようとしたり、次の目標を考えたりする姿が見られた。また、自分が頑張ったことを伝えられる機会も増え、友達同士で話し合っグループとしての評価や目標を考えることにもつながった。

3 おわりに

本校で作成した「実態表」「単元計画表」を基に実践報告会を行うことで、実践を共有し、授業づくりのヒントを得ることができた。学習後には、児童生徒の変容、成果と課題についてまとめる時間を設け、一人一人に合わせた活用について再検討し、活用方法を改善した。併せて、研究の時間にアプリを紹介し合ったり、使い方を教え合ったりすることで、教師の支援技術が向上し、授業の中での活用も増えてきている。今後も本研究の成果を生かし、一人一人に合わせた学びの継続した支援に取り組んでいきたい。

千葉歴史の散歩道

博物館の体験学習で歴史を散歩する



千葉県教育庁教育振興部文化財課・文化財主事 **はたなか の え か**
畑中 乃咲佳

千葉の歴史を知りたいと考えたとき、どこに足を運ぶだろうか。史跡や古くからある建造物、そして、博物館を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。

博物館は、資料の調査・研究、収集、保存などを基に、展示を含む教育活動を実施する場である。なかでも、体験学習やワークショップと呼ばれる活動は、身体経験を伴うことが多いため、参加者へ強い影響力を持つ。

私は、その体験学習に参加するため、多様なプログラムが設けられている千葉市立加曽利貝塚博物館を訪れた。特別史跡加曽利貝塚の中にある当館では、ボランティアスタッフも多数活躍し、館内だけでなく屋外でも多くの体験に参加できる。私は、そのうち「縄文土器片のレプリカ製作」と「火おこし体験」に参加した。

前者は、まず、「実物」の縄文土器片を触り、土器片がどのような形態・重さ・文様を持つのかを確認してから、粘土をこねて同じ形の土器片「レプリカ」を作る。後者は、弓切り式という方法で、木材間に摩擦を生じさせて火をおこす。

これらの体験を通して参加者の中に築かれる歴史への視点は、スタッフが教える知識だけでなく、参加者自身の体験から生まれた素朴な感想も反映することとなる。つまり、体験学習等の場は、教える・教わるといった立場の違いを乗り越え、博物館の職員と、参加者、またその他の博物館に関わるすべての人

に、モノを介した「自由な」交流を実現する場となるのである。

下の表は、千葉県立博物館で実施されている歴史に関する体験学習等の一部である。それぞれの特色を生かしたさまざまなプログラムが設けられている。

時と空間を自由に散歩する手がかりとして、博物館へ出かけてみてはいかがだろうか。

県立博物館 体験学習等プログラム（歴史関係）

千葉県立 関宿城博物館	体験教室「関宿城下を歩こう」、 歴史講座「古文書を読む」、 子供向けプログラム「せきはく調査隊」 ほか
千葉県立 現代産業科学館	学校など団体向けプログラム（出張講座 「化石のレプリカ」など）ほか
千葉県立 中央博物館	講座「下総台地の地形・地質環境ー博物館 周辺を例にー」など、学校団体向けプロ グラム（学習キット貸出「人類進化学習キ ット」など）ほか
千葉県立 房総のむら	体験演目（食・技・昔を体験「金継ぎ（実 演）」「ミニチュア土器・土偶作り」など）、 団体向けプログラム（風土記の丘資料館 歴史学習用ワークシートなど）ほか

（一部休止中。詳しくは公式HP等を御覧ください。）



千葉市立加曽利貝塚博物館 縄文土器片レプリカ製作の様子

千葉教育 菊（No. 688） 令和6年10月24日発行

編集・発行 千葉県総合教育センター（代表）酒井 誠一
〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13 TEL 043-276-1204
URL <https://www.ice.or.jp/nc/>
印刷所 千葉市療育センター いずみの家
〒261-0003 千葉市美浜区高浜4-8-3 TEL 043-216-2465

次号予告

『千葉教育』 梅 (No.689)

◆特集 学級経営を考える

○シリーズ 現代の教育事情

上越教育大学教職大学院 教授 赤坂 真二
県総合教育センター カリキュラム開発部

○提言

日本パラリンピック委員会 委員長 河合 純一

令和6年度 シリーズ 現代の教育事情

蓮 686号	教職の魅力
萩 687号	交流及び共同学習の実践
菊 688号	小中一貫教育の現状
梅 689号	学級経営を考える
菜 690号	外国人児童生徒等教育の実際
桜 691号	学校・家庭・地域の連携

「千葉教育」は千葉県総合教育センターの
Web サイトから閲覧・ダウンロードできます。

千葉教育
菊号 読者アンケート



表紙写真について

市原市小中一貫教育校加茂学園 「体育祭異学年種目」